メフィストフェレスの資本論

―資本の生成と心理学―

木村雅則

(一)

古今東西を問わず名作と言われる作品はその内容の深遠さからして多面的な解釈が可能である。場合によっては作者の望外の批評も登場する。ゲーテの戯曲『ファウスト』[1]もしかりである[2]。ゲーテ自身「『ファウスト』は未解決の問題に似て何度でも人々の心を惹きつけては、繰り返し考えざるを得ないようにする」と述べている、という（中野和朗)。

本稿では『ファウスト』を近代資本主義批判の書として読み込んでみたいのである。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』の舞台であった中世後期とは違って、ゲーテの生きた時代には、すでに近代資本主義が発展段階を迎え、その矛盾も露わにしつつあった。そこでは希望も不安も、信も不信も、科学技術も幻想も、人間性も悪魔性も、いうなれば坩堝のなかで混じり合って、そこからどのような社会体様が造形されてくるのか定かではない、不気味で混沌とした時代であった。ドラマは劇的で、時空を超え、リアルとバーチャルを行きつ戻りつ、奇抜な趣向を凝らして展開される。『ファウスト』はそこで駆使される錬金術も含め、現代社会への投影としても意義をもつのではなかろうか。その底流に流れるのは人工的なものの空疎さと自然への畏敬である。

実際、ゲーテの自然研究は『ファウスト』の思想的背景をなす。ゲーテによれば形態学は有機体の形成と変形を扱う。理念において同一であるものが、経験において同一か類似している。そればかりでなく全く不同あるいは非類似としても現象しうるということ、本来そこに自然の躍動する生命がある。

まずは原型の設定を行う。原植物や原動物といえる。原動物は究極において動物の概念、理念を表す[3]。　動物の形態の考察において採るべき道はある普遍的な原型、普遍的な図式を構築し、設定することである。それに従って、とりあえず高等動物が推論的に考察され、それに続いて残りの全ての網が詳細に認識されうるような方法を見出すべきである[4]。高等動物の形態が合成されている全ての主要部分は他の動物の場合にも同様に見いだされるが、他方、全く同種のある諸部分の数は変わる[5]。

現にあるものを考察するためには先行した活動を認めねばならず、その活動の根底に作用の及ぶことのできた適当な［相応の］要素があると見做す。そして最後にこの活動がこの根底要素と常に共存し永遠に同時に存在していると考えざるをえない。それが形成衝動（形成を引き起こす衝動ないし激しい活動）である。この途方もないものが人格化されると神、創造者、維持者として現れてくる[6]。

ある有機体が現れてくる場合、形成衝動の統一と自由はメタモルフォーゼの概念なしには把握できない[7]。

誤解を恐れず、ごく簡単に纏めれば、生物には普遍的な原型があり、それが形成衝動の作用を通じて、様々な形相を形成し、多種多様な生態系を創り上げるというのである。この場合、原型と形成衝動は先験的に与えられたものである。

木村直司は『ゲーテ形態学論集　植物篇』の解説においてその研究を以下のように纏めている。

ゲーテの全自然科学思想の根底にあるのは「モナス」と呼ばれる原初の精神的エネルギーである。それは不断の生命力を意味し、これは永遠不変であるが、異なる強度をもって物質を統合する。自然がこの意味で精神的且つ物質的であり、このため物質の特徴である分極性（有機的分裂）が精神的存在にも作用し、また物質が精神の特徴である高進性（高次の統一性）を示しうるという洞察である。それは『ファウスト』の世界観的根本問題である[8]。

ゲーテの見方は生物の形態を環境、とりわけ四大の水、土、火、風（空気）というエレメントとの相関関係から考察することである[9]。生命の営みは種々の力の作用で質料としての素材を取り入れながら形相を実現するプロセスと考える[10]。ゲーテはまず質料としての素材を措定し、それから何らかの能力、次に強制力、内的欲求、衝動などの様々な力を想定し、これらの力が及ぶ生命のプロセスはとりあえず未決定であるが、形式をとるにつれ規定された特殊な形態が形成と変形のメタモルフォーゼを繰り返しながら相互に作用する。その際、原型は不変のままである。ゲーテにとっていかなる自然現象も神的な力としての理念の啓示であった[11]。

そしてこのゲーテの形態論はそのままの形ではないにせよ後世の思想家たちによって受け継がれていく。

ゲーテが『色彩論』において生物界の多様性を説明しようとした形態論の立場からニュートン力学を批判したが[12]、それから半世紀たった１９世紀後半、資本主義の第２段階における重化学工業の飛躍的発展、物理学（巨大実験装置の普及）や生理学が先端分野として発展してきたという時代背景の下、ゲーテのモルフォロギーは改めて新しい精密実証科学に対する科学論の見直しという意義をもって迎えられた。原植物、原型、類型の思考が様々なヴァリエーションをもって蘇っている。ゲーテのモルフォロギーは新しいホ―リズムとして時代に見直され、新しい知の触媒になった[13]。

（二）

こうした思想背景を念頭に置きつつ『ファウスト』の舞台を鑑賞することにしよう。
まずは序曲。

メフィストフェレスは人間社会のことがよくわかっているようだ。主（神）に次のように語る。

「太陽や世界のことは何にも知りませんが、人間の悶えようならよく知っている。この星のちっぽけな神様たちときたら、いつも妙ちきりんでして、天地開闢以来、さっぱり変わり映えいたしませんな。あなたさま［主］が天の光などをおすそ分けなさなければ、もちっとはましな生き方もできたでしょう。人間というやつ、それを理性だのと称して、実のところは獣も顔をそむけるようなことに精出している」。

主もそのことでは頭を悩ましていたようだ。迷える人間たちの代表としてファウストを挙げる。「当人も往き迷って、どうにもならない。ついてはどうにかしてやりたいと思っているところではある」。そこで狡猾なメフィストフェレスは主に賭けをもちかける。「お許し願えれば、手もとにまんまと手繰り込んでみせましょう」。主もその賭けに乗ってみる。「あやつが地上にいる間、そうしたければするがいい。思いがあれば迷うもの。それが人間だ」。「あやつの心を根っこからもぎ取って、好きなように引き回すがよい」。そればかりか「あれこれ手出しをして引き回す悪魔」を相棒としてつけてやる（『ファウスト』18－21 頁）。

ここから錬金術、魔術を駆使した壮大且つ時空を超えた奇想天外なドラマが展開される。節目節目には狂乱的祭りがあり、それらは炎をもって終焉する。

ここでは戯曲の内容そのものには立ち入らず、ひとつ、メフィストフェレスを資本とし、ファウストをその人格化たる資本家とみたて、この戯曲を読み込んでみたいと思う。ここには資本が如何に生成するのか、それが何故、人間的生活にとっては常態ならざる活動態様をとるのかを解明する[14]ヒントが示唆されている。祭りやどんちゃん騒ぎは、従って投機熱、バブルということになろう。

物語はファウスト博士の独白から始まる。ファウストは思い迷い、憂鬱と自己嫌悪に陥っていた。「よろこびもまるきりない。正しいことを知っているとは思わないし、人間を良くしたり、回心させたり、その手引きが出来るとも思わない。財産もなければ、金もなく、世の栄誉や権威とも縁がない」。「しゃかりきになって、哲学、法学、医学、神学をやった。挙句の果てにわかったのは何一つ知ることが出来ないこと。この世を最も奥の奥で動かしているものは何か、それを知りたい。全て生あるものを動かしているものは何か。そのもとは何か。そいつをこの目で見さえすれば、あれこれ言い募るまでもないのだ」。「神は人間を生気溢れた自然の中に創造したはずなのに、おまえときたら煤と黴に包まれ、獣の骨や骸骨と交わっている」（『ファウスト』２６－７頁）。「山のような本を読んでわかったことと言えば、精々の所、この世には苦しんでいる人がどっさりいて、そこにちらほら幸せ者がいるといったぐらいだ」（『ファウスト』３７頁）。ファウストは自分が「蛆虫そっくり」だと卑下し、絶望して毒杯をあおろうとする。それを思いとどまらせたのは天使の明るい歌声であった。

そのファウストのまえにメフィストフェレスが現れる。
メフィストフェレス曰く、「人間界はバカ者の小宇宙であって、いつも自分を一つの全体のように思っているが、こちらは部分の一部でありまして、はじめは一切であった所、のちに闇の一部になりましてね。闇から光が生まれますと、傲慢に光は母なる闇と空間の争いを始めました。どうしても光に勝ち目がないのは物体にはりついているから」。メフィストフェ

レスはこう挑発したうえでファウストに一つの契約をもちかける。「世の中に踏み出す気持ちがあるなら、お供する。いい思いをさせてやる。誰もまだ見たことのないものを見せてやる」。

ファウストはそれを受ける。蓋し『初めに行為ありき』、行動こそファウストの望んだ人生の規範だからである。「『時よ、とどまれ、お前は実に美しい』。もしそんな言葉がこの口から洩れたら、すぐさま鎖につなぐがいい。喜んで滅びていこう」。（『ファウスト』７８－８０頁）

メフィストフェレスは秘かにほくそ笑む。「理性と学問を軽蔑するがいい。人間の最高の力ではあるんだがね。代わりに魔術と手妻でもってイカサマ精神のツッパリとする。いずれにしてもあやつはこちらのものだ――これからは生臭い生活とたわいのない俗事の中を引っ張りまわしてやろうじゃないか。あわてふためく、つっぱるだろう。しがみつきもする。飢えた口元に食べ物や飲み物をちらつかせてやる。身も世もあらず哀願するに違いない。悪魔の軍門に下らないまでも、破滅することはうけあいだ」（『ファウスト』８６頁）。

手始めにメフィストフェレスはファウストに若返りの秘薬を飲ませる。それには媚薬も仕込ませてある。ファウストは早速、たまたま通りかかった清純な乙女マルガレーテに惚れる。ファウストは理性と欲情の狭間で苦悩する。「悪徳がこの胸に、あの美しい姿への思いの火をかきたて、せんがなく欲望へとよろめいていく。そして享楽のなかで欲望に焦がれていく」。当時の社会の常識からして人倫に反する禁断の恋は未婚の少女の懐妊、家族の死を齎す。ファウストは異端者となったのである。

罪と恥の意識に耐えられず、マルガレーテは失神する。ファウストは愛を貫くことは出来ず逃げ出す。ファウストはメフィストフェレスに誘われるまま、酒池肉林の世界へ向かい、放蕩三昧の生活を送る。他方、マルガレーテは牢に繋がれ、処刑を待つ身となる。それを知ったファウストはメフィストフェレスの助けを借りて牢から助け出そうとするが、敬虔なマルガレーテは神の裁きに委ねると言って逃げない。止む無くファウストはメフィストフェレスとともに牢獄を去る。愛するマルガレーテとの別れである。つまるところ愛を捨てたのである。こうして第１部の悲劇は幕を閉じる。

ファウストが告白したように「私［人間］の中には２つの魂がある。一つは欲望をむき出しにしてこの世にしがみついている。もう一つは高く地上から飛翔して天界のもの達に憧れる」（『ファウスト』１６７頁）。どうやら前者が強力であったようだ。これはフロイトのいわゆる欲動と超自我に相当する。その欲動は性欲動だけではない。ユングの言うように多様である。物欲もあれば、権勢欲もある。

メフィストフェレスはまんまとその欲動を引きずり出したのである。資本主義的精神は何らかの契機で無意識の領域（フロイトの言葉でいえば前意識的領域）から、とりわけ物欲や支配欲といった欲動が顕在化したものである。

(三)

『ファウスト』はユングらの心理学の格好の教材となっている。
フロイトを含めた１９世紀後半のヨーロッパの若い知識人に悪魔を身近にしたのは『ファウスト』であった。フロイトにとって、悪魔は超自然的な実在ではなく、一種の隠喩である。それは「抑圧された無意識の本能生活が擬人化されたもの」であり、「悪魔とは単なる迷信ではなく、我々から見れば、不道徳な、非難さるべき願望の謂い、であり排斥された欲動活動の派生物に他ならない」という[15]。

まずはフロイトの思想を検討してみよう。
人間には無意識の思考とか無意識の意欲といったものが存在する[16]。それには自我欲動と性欲動（リビドー[17]）があり、両者は葛藤しつつ、快原理と現実原理を通して発現する。前者は心の充足の作動機制であり、性欲動において最も強力である。後者は現実を考慮して快を先延ばし、減少させる。自我の発達による[18]。文化とは生きる上で必要に駆られ、欲動の満足を犠牲にして創造されてきた[19]。

フロイトは古代ギリシャの哲学者エンペドクレスを引き合いに出す。彼は物の多様性を四大（地、水、火、風）の混合によって説明していた。他方、生物の段階的進化、適者生存、進化における偶然の果たす役割の認識なども見られる。その教えによれば世界の生活の出来事にも、心の生活の出来事にも、お互いに永遠の闘争状態におかれている２つの原理がある、つまり愛と争いである。フロイトのエロスと破壊を２つの原欲動とする考えと同様の考えをもっていたという[20]。

意識を区分すると意識的／前意識的（潜在的なだけですぐ意識化される無意識的なもの）／無意識的（意識的なものへの転換が困難か不可能なもの）に分かれる。無意識は作用の結果から推してそれが存在していることを認めざるを得ないけれども、それについて今何も心得ていないような心的出来事のことである[21]。

人間の心の装置はエス、自我、超自我の３つの区域に区分される。エスは心の生活の広大且つ重要な領域であり、普通は自我の関知する所ではなく、この領域での出来事は正真正銘の力動的な意味で無意識的である。自我と超自我の一部もまた力動的な意味で無意識的である。この領域をニーチェの言語使用に則し、Ｇ．グロデックの促しに従ってエスと呼ぶ。エスは価値判断を知らず、善悪も道徳も知らない。そこでは経済論的契機もしくは量的契機が快原理と緊密に結びついて一切の出来事を仕切っている。放散を求める欲動備給、エスの中にあるのはこれに尽きている[22]。

自我は自分自身を客体化することが出来る[23]。だから自己と外界やエスとの係わりを客観的に観察することもできる。自我は知覚‐意識系という心の装置の最表層部と関係し、この系は外部からやってくる興奮刺激を感知するだけでなく、心の生活の内部からやってくる興奮刺激も感知する。自我は刺激受容と刺激保護をこととするようになったエスの一部であり、生命物質の魂を包み込んでいるものであり、外界との交渉を自らの本務とするようになった。自我は自らがもっている諸内容を纏め上げ、統一しようとする傾向をもつ[24]。その意味で自

我は心の生活において理性と思慮を代表する。これに対しエスは制御しがたい情熱を代表する[25]。

超自我は良心といった審級であり、自我理想なるものの担い手でもあり、それに照らして自らを測定し、これを模範にして励む。超自我によって継承されるイデオロギーのなかに過去つまり種族と民族の伝統が生き続けている。人間生活の中で経済的諸関係などに左右されない強力な働きを行使する[26]。

自我は外界と超自我とエスの主張と要求を調和させようと苦労している[27]。自我がエスと現実の折り合いをつけながら我々は生きているのである。

フロイトは宗教には否定的である。宗教とは私たちが生物学的並びに心理学的な必然性に従って自らの間に育て上げてきた欲望世界をもとに私たちの住まっている感覚世界を制覇しようとする、ひとつの無益な試みに過ぎない[28]。科学的思考がもとめているのは現実に一致することである[29]。

哲学にも意義は認めない[30]。科学と認めるのは自然学と心理学だけである[31]。フロイトは唯物論者であり、ダーウィン主義を受容し、更にはラマルク主義にまで行きついた[32]。ここまでくるとゲーテとの距離はかなり大きい。

マルクス主義に対しては聊か単純化した上で批判を加えている。
経済的動機だけが社会における人間の行動を決定する唯一のものではない。経済的諸関係が生み出される所には既に心理的ファクターが関与している。そこでは人間は自己保存欲動、攻撃欲、愛情欲求など、自らの根源的な欲動の蠢きを発動させ、快獲得と不快忌避を衝動的に求める。また超自我が過去の伝統と理想形成を代表し、新たな経済状況からの動因に対して抵抗したり、経済的必然性に縛られている人間集団の上にはさらに文化発展の過程も流れている[33]。

ともあれ、人はもっとも強力な性欲動を抑えつつ、自らの生きる途を求めて、格闘、葛藤しているのである。その一つに経済的成功がある。

ゲーテのユングへの影響は大きい。ユングは語る。『ファウスト』は私の心をゆるがせた。なかでも対立性の問題、つまり善と悪、精神と物質、光と闇といった対立の問題を私の中に呼び覚ました。凡俗のファウストが彼の存在の暗闇、不気味な影であるメフィストフェレスに出会い、その否定的本性にも拘らず、ファウストに真の活力をあらわして見せたのである。私の内的な矛盾対立がここでは劇的な形であらわれていた。ゲーテは私自身の葛藤とその解決についての基本的な概観と図式を与えてくれたのも同然であった。ファウスト―メフィストフェレスという二分法が私の中では一人の人物となってあらわれ、それが私であった。……後日、私は自分の仕事を意識して、ファウストの看過したものに結びつけた。それは人間の永遠の権利に対する畏敬、「古きもの」の認知、及び文化と精神史の連続性といったものである。我々の心は身体と同様に全てはすでに祖先たちに存在した個別的要素から成り立っている。個人的な心における「新しさ」というのは太古の構成要素の無限に変化する再構成なのだ[34]。だから私の生涯の仕事は大部分、対立性の問題、とくにそれらの錬金術的な象徴の研究をめぐって費やされた[35]。

人間が自分自身と不一致であることこそ、そもそも文明人の一特徴である。本来ならば人間は自然と文化とを自己自身において統一すべき存在である。文化とは人間の内部にある動物的なものを馴致していくことである[36]。

［自我と衝動の］対立統合の自然的過程は、本来、無意識的な、そして自動的に起こる所のものを人為的に呼び起こして、それを意識と意識的把握に近づける[37]。

人間の本性は自我の原理と衝動の原理との間の戦いが果てしなく続けられていく舞台なのである。ゲーテは『ファウスト』第一部で衝動の容認が何を意味するかを我々に示した。第二部では自我及び自我の不気味な無意識的世界の容認が何を意味するかを示した[38]。

ユングはフロイトからは離れて、より多面的な見方をするようになる。

ユングのフロイト批判は中々に厳しい。フロイトの神経症に関する性理論は一箇の本物の、そして具体的な原理に基づいているものの、しかし一面性と専一性の誤謬を犯しているのみならず、この人間によっては捉えがたいエロスを粗雑な術語で始末しようとする不用意さも犯している。この点でフロイトは世界の謎をきれいさっぱりと試験管の中で解決しようと意図した唯物論時代の典型的な一代表者である。フロイト自身、晩年には自己の理論の片寄りを認めて彼がリビドーと名付けたエロスに破壊及至は死の衝動を対置させた[39]。衝動には種保存の衝動のみならず、自己保存の衝動もある。ニーチェはこの第２の衝動、すなわち権力への意志について語っている[40]。

ユングは更に近代社会批判に向かう。

啓蒙時代に至って初めて神々は実在せず、心的投影物であることが分かってきた。だが神々の存在を捉えるのに役立っていた心理的機能は片付けられてしまったわけではなく、その機能は無意識の手中に帰してしまった。そのために以前は神々の崇拝のうちに費やされていたリビドーが使用されずに蓄積されることになって、人間自身は却って禍を招くに至った。……無意識はその古代的（神話的）集合内容を以って意識に巨大な影響を及ぼし始める。……実際、集合的心の無意識的な破壊的な力を経験することになる[41]。［例えば、世界大戦。あるいは狂乱的バブルとその破綻］

近代生活の合理主義は非合理的なるものの機能を無意識へと追放した。だがこの機能がひとたび無意識の中に入ってしまうと、この機能は無意識から止めどもなく働きかけてくる。そうなると個人も民族も強迫的に非合理的な生き方をしなければならなくなり、その上まだ、その最高の理想主義とその最も貴重な分別とを非合理的なものの馬鹿々々しさを出来るだけ完全にするために使用せざるを得なくなる[42]。

そこで人類史の活動残滓たる集団的無意識との折衝（超越的機能）が必要となる。［ユングは現代文明の闇の部分からの人間救済という自らの使命を見出すのである］

無意識には個人的無意識と集団的無意識がある。抑圧されているけれども意識化可能な無意識部分を個人的無意識と名付ける。集合的無意識はもっと深い層にあって様々の非個人的な普遍的な人類の基本特性を秘める［「我々が到達できない人間の認識の深い深淵（カント）」］[43]。

実際、かけ離れた民族や人種において無意識の符合が見られる。例えば、原住民たちの神話の形式やモチーフが瓜二つと言っていいほど酷似しているのである[44]。そして意識化され

た個人的無意識の内容には無意識の集合的諸要素も付着している。一般的に広く存在している欲動、素質、理念（イメージ）がそれである[45]。

誰も無意識から随意に活力を奪うことは出来ない[46]。個性の独自性とは決して個性の主体や構成要素の異質性ではなく、もともと普遍的な諸々の機能や能力が独自に混じり合っている一状態ないし程度の差として異なって表れているものである。人間の普遍的因子はそれぞれに異なっており、この差異性が個性の独自性を可能ならしめるのである[47]。

無意識的事象は意識とは補償的関係にあり、互いに補いあって一個の全体へ、本来的自己へと至るものである[48]。意識の世界と無意識の世界、この二つの対立する「現実」があるが、これは覇を競い合うのではなく、お互いに相手を相対的なものとしあう。両者の現実とも心的体験であり、それと識別し難い暗さの背景をもった心的な仮象である。本質的なもの、絶対的に存在するものについて我々は何も知らない。しかし、様々の作用を我々は体験する。空想体験はその表現であり、仮象である。空想の出来事に積極的に関与することによって、さもなければ無意識である空想を絶えず意識化していくとその結果はどうなるか。まず第一に意識が拡大される。第二に無意識の支配的な影響が次第に削減される。第三に人格変貌が生じる[49]。

無意識との対決によって達成されるこの変貌が「超越的機能」であり、超越的機能において表現される人間の心（Ｓｅｅｌｅ）の注目すべき変身能力は中世後期の錬金術的哲学の最大の対象である。一連の変転を通じて人格（本来的自己Ｓｅｌｂｓｔ）の中心点に到達する。それは意識と無意識との中央にある一点―新しい均衡点である。例えば、老子の道（タオ）、つまり中庸である[50]。ギリシャ的根源的な叡智もしかり。『何ごとも度を超すなかれ、全て良きものは中庸にあればなり』である[51]。

だが西欧の精神は科学的で道徳的な確実性を備えた合理的世界観である。それは無意識を神秘論として片付ける。内的経験の基礎的主要部たる中庸の道において諸対立を統一するということに対して一個の概念すら見出していない[52]。

対象に重点を置いた西洋的精神態度はキリストという「模範」を自己の外にある客体と見做し、それが人間の内面に対してもっている秘密に充ちた関係を無視する傾向がある。キリストという模範はこの世の罪を背負い込んだ。従って、もし模範キリストが我々の外にあるとすれば、我々、個々人の罪もまた外にあるということになり、それによって個々の人間は自分の罪をキリストの上に投げやり免責することにもなりかねない[53]。それは生きていく上での実際的必要から生じたものであり、懺悔という行為は生きるという行為と同じ意味を持っている。但し、葛藤そのものは残る。これは矛盾と統一とを一身に具現している個我の二律背反的特質に一致している[54]。矛盾をひとまず懺悔という行為によって糊塗することは資本主義精神を受容する要因ともなりうる。

アメリカのスピリチュアリズムは西欧の精神の閉塞を聊か粗雑な形でひっくり返した。アメリカに移住したヨーロッパ人の末裔が文明史的にみれば、信じられないほど短期間に心の変容をきたしている。ユングはこの心の変容を精神医学の視角から直視した。［ユングの見立てでは］それは原住民のインディアン、アフリカから連れてこられた黒人の心性の影響であり、シャーマニズムまで遡るものである。物質文明がヨーロッパの伝統から断ち切られ

た地に繁栄したかに見えたアメリカでは逆に心の遡源（ゴーイング・バック）が行われている[55]。

むしろヨーロッパで衰弱した人間の原質的なものを甦らせて、それが英雄神話の生きた熱狂性に現れ、そこに「神秘的融即」（レヴィ＝ブリュル）が生き、現代の企業欲にもつらなった。［ユングは］アメリカにヨーロッパの合理主義とキリスト教の下で閉塞していた社会の裏返しを見出したのである[56]。

豊かさの代価は大きかったようだ。利益の焦点を合わせた結果、意図的な現実認識障害が生み出された。私たちの経済及び私たち自身は非合理的な振る舞いをするようになった。そして「あえて需要を作る」ための様々な学問は人々の目に、一見完全に合理的で公正なものに見えてくる[57]。

攻撃性、また幾つかの点で悪性ナルシシズムやサディズムは経済的成功を確保する。今のように「枷の外れた」経済は、手荒な行動様式に何倍もの報酬を与えるから。無慈悲、貪欲、功名心、金銭への執着、そして権力をもって経済競争を制したい強い意志。こうした性質をもつ人は病的なナルシシズムとサディズムに近く、そこに満足を感じることも多い。

アメリカの心理学者サラ・Ｈ・コンラートが２０１０年に行った研究によるとアメリカの大卒者では１９７９～２００９年の間に他者への共感が低下し続けているという。またカナダの心理学者ロバート・ヘアとアメリカの企業コンサルタントのポール・パビアクは経営者や企業家への何百ものインタビューを行った結果、高度競争社会の上層レベルでは通常の社会に比べ、サイコパス（精神病質）の割合が３倍も高いと結論づけた。ヘアによれば「利益やメリットが得られそうな場に引き寄せられる社会の捕食者をイメージすればよい」[58]。

オーストラリアの精神科医ハンス・シュトロッカの定義によれば、神経症では超自我が発達し過ぎて不安や症状の形成に至っているが、サイコパスでは特定の環境条件から超自我が十分に発達しておらず、その結果が反社会的態度になっている[59]。

かのエンロンの社訓は「貪欲に、更に貪欲に」である。その上層部は電力価格が低いと感じたならば、発電所を停止させた。その結果、価格が高騰すると再稼働した。カリフォルニアでは短期間の間に何度も「ブラックアウト」が起きた[60]。

経済は今、鬱病より、むしろ双極性障害（躁鬱病）に陥っている[61]。

現在、過去を問わず、あらゆる政体のなかで「罪」が人間の精神にどれだけ深く巣食っているかを理解しているのは民主主義下の資本主義だけだ。資本主義は「堕落した世界」を現実の土台とし、その上で「エネルギーを創造力に転換する」ことに成功した（マイケル・ノヴァク『民主的資本主義の精神』より）[62]。

こうした脈絡の下でユングは錬金術の再評価を試みる。

ユングは実験室の錬金術は化学にその城を明け渡したが、錬金作業の心の領域は消滅せず、新たな解釈者の登場を促した、と考える。それは『ファウスト』の例や、無意識を問題とする現代心理学の錬金術象徴に対する深い関係にみられる[63]。

ユングは『心理学と錬金術』において錬金術の精神史的意義を解明し、その宗教的、心理学的問題を提示した。「錬金術は地表を支配しているキリスト教に対していわば地下水［脈］をなしている。錬金術のキリスト教に対する関係は夢の意識に対する関係のごときものであ

る。夢が意識の葛藤を補償し、融和的作用を及ぼすのと同じように、錬金術はキリスト教の緊張せる対立が露呈せしめたあの裂け目を埋めようと努める」[64]。

無意識の内容の投影とは未知なる何らかの外的なもののうちに自分自身の内面を見出すことである。例えば、占星術は錬金術に似た人類の原体験である。未知の空白の領域を人間臭に充ちた諸形態で埋めてしまう[65]。

だが無意識内容が投影によって、意識領域へ移され、意識が増大すると、つねに「膨張（インフレーション）」の危険を孕む。意識膨張は逆説的に言えば意識の無意識化を齎し、識別能力を失い、自由な意思決定ができなくなる。それが誰もが望まなかった凄惨と野蛮の一大狂宴、世界大戦を齎した[66]。

心はそれの意識への同化には極めて大きな危険を伴う諸内容を隠しもっている。意識の思い上がりをはねのけ、人間の知的理解力の限界を自覚すべし、というのがユングの一応の結論である[67]。

こうしてみてくると心理学ないし精神分析と経済学とは架橋できるのかもしれない、と思う。実際、何人かの経済学者は心理学との接点を模索している。

例えば、トーマス・セドラチェクやオリヴァー・タンツァーは「心理学的手法で論証された経済学」の確立を望んでいる[68]。

周知のようにシュムペーターは経済発展の原動力がイノベーション＝「創造的破壊」にあることを主張した。その「新結合」を遂行する能動的主体が企業家であり、その創意、権威、洞察力、意志の強さ、精神的自由などの特性によって特徴づけられる一つの類型を描き出した。この類型、とくに私的資本主義的企業家の行動動機を検討する際に、心理学にも触れて凡そ次のように述べている。全く心理学の助けなしに、すなわち観察されうる行動の研究や解明なしに、全ての我々の問題を解決しなければならないという見解は幼稚である。心理学といえども客観的に確定しうる反応を取り扱うものであるから、我々が心理学を研究するのは、経験できないものとか、単に主観的に存在するものの中に逃げ込むわけではない。我々が目に見える経済行動を分析しているからである[69]。

この企業家類型は合理的かつ快楽的な個人利己主義の画像によっては正しく捉えられない。確かにその動機は欲望充足のための財貨獲得という利己主義、それもとくに強烈な「高度な利己主義」とも言えるものに彩られている。彼らは伝統も係累ももたず、あらゆる束縛を打破する真の原動力をもつ。自分の育った社会層や自分の参加する社会層の超個人的価値体系に対して全く無縁であり、功利主義哲学の先駆者でもある。だが、退嬰的な享楽に対して著しく無関心であり、豪奢に暮らすためだけに資力を獲得するのではない。自分の行動の快楽的成果を気にかけず、他になすべきことを知らないために絶えず創造するのである[70]。

シュムペーターの企業家類型では「ますます多くを」というモットーが成立する。
その動機は第一に必ずしも必然的ではないが、多くの場合、自己の「王朝」を建設しようとする夢想と意志である。この動機はある者にとっては「自由」と「人格の基礎」、ある者にとっては「勢力範囲」、ある者にとっては「えらがり」というようにあらわすことが出来る。次が勝利者意志である。闘争意欲や成功獲得意欲がそうである。最後に創造の喜びである。

一方では行為そのものに対する喜びであり、この類型ではつねに余力を以って他の行動領域と同じように経済的戦場を選び、変化と冒険と困難そのものとのために経済に変化を与え、経済のなかに猪突猛進する。他方では、仕事に対する喜び、新しい創造そのものに対する喜びである。

それ故、経済生活において確認しうる多様な動機や、企業家類型の行動に対する動機の事実的重要性が研究されねばならないのである[71]。

ケインズは投資誘因について語る時、「アニマル・スピリット」の意義を強調した。「古い時代には、投資は、一生の仕事として事業に乗り出す血気盛んで建設的衝動にかられた人々がふんだんにいたことに依存して」いた。「投資の現実的な成果は、おそらく進歩と繁栄の時代においてすら、投資を鼓舞した希望を裏切る程度のものであったであろう。実業家たちは技能と偶然とが混じったゲームを演ずるのであって、競技者にとってのゲームの平均的な成果は参加者たちにはわからない。もし人間本性が一か八かやってみることに何の誘惑も感ぜず、工場や鉄道や鉱山や農場を建設することに（利潤を獲得すること以外に）なんの満足も覚えなかったとすれば、単に冷静な計算の結果としての投資はあまり多くは行われなかったに違いない」[72]。

我々の積極的な活動［投資］の大部分は、数学的期待値―道徳的、快楽的、経済的を問わず―に依存するよりもむしろ、自生的な楽観に依存しているという人間本性の特徴に基づく不安定性が存在する。将来の長期間を要するような、なにか積極的なことをしようとする我々の決意のおそらく大部分は、血気―不活動よりはむしろ活動を欲する自生的衝動（animal spirit）―の結果としてのみ行われる。もし血気が鈍り、自生的な楽観が挫け、数学的期待値以外に頼るべきものがなくなれば、企業は衰えるであろう。このことは沈滞や不況の程度が過大なものになることを意味するだけでなく、経済的繁栄が普通の実業家の気に入った政治的、社会的雰囲気に過度に依存することをも意味している。従って、投資の見込みを推定するに当たっては、投資がその自主的な活動に大きく依存する人たちの神経過敏性、ヒステリー性、更には消化力、天候に対する反応といったものまで考慮しなければならない。車輪を回転させるものは我々の生まれながらの活動への衝動であって、我々の合理的な自己は、可能な計算をしながらも、しばしば動機として気まぐれや感情や偶然に頼りながら、できる限り最善の選択を行っているのである[73]。

西部邁の象徴的意味体系を軸とした文化論を継承した佐伯啓思も経済における心理の役割を強調している。

現代の資本主義を動かすものはただ市場メカニズムではなく、人間の心理であり、心理を集合的なものとして表現する社会の価値や文化である。そこでは金融家が抱え込んでいる抽象性の空無の根源を埋めるフィクションは貨幣である。欲望はモノ自体には向かわず、欲望自体［すなわち抽象的富としての貨幣］を追い求める。その意味で分裂症的資本主義である[74]。

（四）

ここで『ファウスト』第１部の物語を経済世界に翻訳してみよう。その文脈は商品・貨幣から資本への転化における内的衝動の諸力の存在を示唆する。

自給自足経済においては生産物の生産は己自身の必要の範囲で行われる。だが市場経済においては生産物は商品となり、商品が商品たりうるのは他人の欲求を満たしうるからである。商品はその欲求に適合すべきものでなければならない。交換経済においては他人の欲求を引き出しうるならば、それに応じてまたおのれの欲する財貨への交換権能を得る。それはおのれ自身の慎ましい生活維持の経済活動を超えて、無限の欲求充足への途を拓く。それはまた資本生成の契機でもある。

商品世界では「労働生産物は、それらの交換の中で初めてそれらの感覚的に違った使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象性を受け取るのである……有用な諸物が交換のために生産物され、従って諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものに際して考慮されるようになった時に、初めて……生産者たちの私的諸労働は実際に一つの二重の社会的性格を受け取る。それは一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たさねばならず、そのようにして自分を総労働の諸環として、社会的分業の自然発生的体制の諸環として、実証しなければならない。他面では、私的諸労働がそれら自身の生産者たちの様々な欲望を満足させるのは、ただ、特殊な有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、従ってこれと同等と認められる限りのことである」[75]。

「生産物生産者たちがまずもって関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が得られるか」という問題である[76]。

「商品生産がさらに発展するにつれて、……［商品生産者］の欲望は絶えず更新され、絶えず他人の商品を買うことを命ずる」[77]。

「商品流通の拡大につれて、貨幣の力が、すなわち富のいつでも出動できる絶対的な社会的な形態の力が、増大する」。「流通は、大きな社会的な坩堝となり、いっさいのものがそこに投げ込まれてはまた貨幣結晶となって出てくる。この錬金術には聖骨でさえ抵抗できない」[78]。

この「商品流通は資本の出発点である」[79]。前貸しされた貨幣［価値］が流通に投じられ、より多くの貨幣［価値］として還流してくれば、「この運動がこの価値を資本に転化させる」[80]。

「資本の運動には限度がない」[81]。「この運動の意識ある担い手として、貨幣所有者は資本家になる。彼の一身、またはむしろ彼のポケットは、貨幣の出発点であり帰着点である。あの流通の客観的内容―価値の増殖―が彼の主観的目的なのであって、ただ抽象的な富をますます多く取得することが彼の操作の唯一の起動的動機である限りでのみ、彼は資本家として、また人格化され意志と意識を与えられた資本として機能するのである。だから、使用価値はけっして資本家の直接的目的として取り扱われるべきものではない。個々の利得もまたそうではなく、ただ利得することの無休の運動だけがそうなのである。この絶対的な致富運動、

この熱情的な価値追求は、資本家にも貨幣蓄蔵者にも共通であるが、しかし、貨幣蓄蔵者は気の狂った資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者なのである」[82]。

こうして「近代社会はすでにその幼年期にプルトン（富める者）の髪をつかんで地中から引きずり出した」[83]。

「貨幣の資本への転化」については、かつて『資本論』の準備ノートであった『経済学批判要綱』の公刊を契機にひとつの論争を呼び起こし、一時期、経済学界、とりわけ宇野学派の論壇を賑わした。それがどのような成果を齎したかは必ずしも定かではないが、宇野学派内部の対立点の顕在化を促したであろうことは間違いない。というのも、この論争においては流通形態による生産過程の包摂という、マルクスに対する宇野理論の積極的内実が一層鮮明化されると共に、その理論展開の中に混淆されていた異質な論理が、それぞれ一面化して強調されることになったからである。それは単に純粋資本主義論に対する世界資本主義論の対立というだけではなく、歴史と論理の関連を巡る見解の対立としても[84]、あるいは一方でのマルクス理論のヘーゲル的再構成（つまり、ヘーゲルの「始原」＝「絶対理念」を商品論に置き換え、その自己展開として原理論を説くがごとき方法）[85]と、他方でのモデル分析的方法（原理論を現状分析のためのツールとして位置付ける）[86]との対極としても現れた。殊に、この論争では形式的な移行という面に重点が置かれていた嫌いもあり、ヘーゲル論理学の存在論における移行の論理をそのまま適用したかのような議論も見られた[87]。だが移行の形式論理に拘泥し過ぎることは、得てして資本形式論の内容自体を観念化する惧れもある。叙述の形式は分析の結果に過ぎないという自明の理を確認するまでもないが、まずもって資本主義経済の流通世界において、現に存在する資本家的活動の中から、その行動パターン、行動動機などを抽出していく作業が必要であると思われる[88]。

実際、宇野によれば、経済学は「人間の社会的行動の法則性」の解明を目的とし[89]、その法則は「単なる客体的に作用する法則ではなく、個々の個人の主観的行動によって社会的に形成せられて客観的に作用する法則」である[90]。だから「原理論で明らかにされる諸法則も、個々の商品所有者及至販売者が出来得る限り有利な売買をなそうということから結果的に展開される」[91]のであり、「資本家や労働者の個別的な意識的活動の結果に他ならない」[92]。そして「資本家は資本の規定から与えられる動機をもって行動する」[93]。とすれば、貨幣の資本への転化によって生成する資本の運動形式は、資本家の行動様式の物象的形態として明らかにされねばならないであろう。

この行動様式自体は、商品経済の発展とともに歴史的に形成される以外にはない。利殖的行為が社会的に受容され正当化されるのは、その通俗化の歴史的過程を必要とする。同様に利潤動機に基づく商人的活動の社会的認知もまた歴史的産物である。この人類史に普遍的ならざる特殊な行動原理が、一定の歴史的な条件を与えられれば、一つの経済社会を編成し、統合する主導的原理となる。そこに本質的な意味での歴史性がある。

「最も抽象的な範疇でさえも、それらが―ほかならぬそれらの抽象［性］の故に―すべての時代に対して妥当性をもつにも拘わらず、この抽象という規定性から言えば、やはりまぎ

れもなく、歴史的諸関係の産物であり……、そしてこの完全妥当性をこの諸関係に対してだけ、この諸関係の内部でだけもつ」[94]。

無論、「理論的解明は、その対象の歴史性を歴史的過程としてはそのまま展開」できるわけではない[95]。歴史的過程を与えられたものとして、歴史的に特殊な行動原理がすでに経済の深部を捉え、全面的に現出されたものとして、従って純粋な資本主義社会を前提して、資本家的活動様式を解明するのである。

「より単純な範疇は、より具体的な範疇に先立って歴史的に現存していたことがありうるとしても、それが内包的にも外延的にも完全に発展した形で、まさに複合的な社会形態のものとなる」[96]。

宇野も言う。商品、貨幣が「単なる流通形態として抽象される点が、むしろ資本主義的関係からの抽象といえる」[97]。

結局、貨幣と資本の間には大きな断層がある。貨幣の存在からの内在的移行論理によって資本が生まれてくるわけではない。能動的行為者としての商品生産者、貨幣所有者を、そして抽象的富の増殖動機を想定する以外にない。彼らは歴史過程のなかでは伝統的社会の外部に異端として登場してくる。そして伝統的社会秩序の揺らぎと共に生長してくる。その生成の契機は様々である。

周知のようにマックス・ウェーバーは産業資本家の出自の緻密な実証研究を通じて、その生成にとってプロテスタントの倫理観が触媒となった、と結論づけた。

ウェーバーはドイツの諸地域においてカトリック信徒の職人は、手工業を続け、親方職人になる道を選ぶことが多いのに対し、プロテスタントの職人の多くは、工場経営の幹部や熟練労働者の上層になろうとする事実を見出した。それによりプロテスタンティズムのエートス（禁欲・勤勉など)）が西欧における近代資本主義の発展にとって精神的推進力となったことを示そうとした[98]。

だが、この研究では資本主義の精神とプロテスタンティズムとの内面的な親和性は明らかになったとしても[99]、何故、資本の論理が生まれるかは解明できない。小生産者から階級分解して、自生的に資本主義経済が発生してくるわけではない。伝統的経済社会とは異質な論理がいかにして生まれ、社会的生産を捉えるに至るのかが問われねばならない。

ヴェルナー・ゾンバルトは全く異なった見解を提示した。ゾンバルトは、ウェーバーとは違って文献考証により、むしろ異端者が資本主義精神の体現者、積極的担い手として現れてくることを明らかにしようとした[100]。資本主義企業家の出自は多様であり、それらのタイプを略奪者、地主、官僚、投機家、商人、製造業者たちに求めている。それらは今日でも馴染み深い顔ぶれである、という[101]。

資本主義の精神の発展は、明らかにスペインにおいてはカトリックによって阻害された。この土地では宗教的関心があまりにも発展したため、ついにこれが他の全ての関心を覆い隠してしまった。ピレネー半島の歴史がほとんど千年に及ぶキリスト教とイスラム教との戦いの歴史により埋め尽くされた[102]。他の全ての国々では、カトリックは資本主義の精神の発

展を速め、且つ促した[103]。14 世紀以来、カトリック教界を支配したトマス・アクィナスの思想つまりトマス主義はキリスト教に当初から含まれていた 2 つの要素、パウローアウグスティヌス流の愛と恩寵の宗教と、律法の宗教とを一つの統一的全体に統合した。トマス主義は２つの宗教を下位と上位の２つの「目的段階」の関係にもちこむことによって、そのことを実現した。キリスト教的社会生活と世俗内生活の形成、従ってとくに経済に取り組む人々の態度への宗教の影響にとっては、ただこの上位の目的段階が問題となる。このトマス主義の律法倫理の基本理念は、生の合理化である。永遠に神聖な理性の世俗内―自然の律は、感覚、情緒、それに情熱を、理性目的にあわせて整頓し、規制せねばならない。とくに性欲を制御せねばならない。この合理化の基本理念の中から資本主義的思考の本質的促進が発生した。利益追求の観念も、経済的合理主義も、根本的には全て宗教一般が経済生活に課した生活の規則に他ならない。本来の自然のあるがままの生に代わって、とくに合理的な精神の機構を確立しなければならない。教会の教えを通じて、性格からして資本主義の精神の成長を促した特別な精神状態が発生した[104]。

ゾンバルトはウェーバーとは逆にプロテスタンティズム（ルター派やカルヴァン派―ピューリタニズム）の倫理に内在する反資本主義的傾向を示そうとした。少なくとも初期資本主義段階においてはそうである、という[105]。まずピューリタンの倫理学においては初期キリスト教の貧困の理想が再び強力に前面に出てくる。富を獲得しようとする努力、とりわけ資本主義的な利益追求が一層厳しく排撃される。「明日のことを思い煩うことなかれ」（福音書）。「金銭欲は全ての罪悪の根源である」。「現世における苦しい配慮、あの世における処罰こそ、お前がおのれの金銭のために支払う、真に高価な代償である」、等々（バックスターの『キリスト教辞典』）[106]。

それにも拘らず、ピューリタニズムは、不本意ながらにせよ、おのれの本質を別の形で表現することによって、資本主義に好都合な影響を及ぼした。ピューリタニズムの倫理学は、再び生活の合理化と方式化、衝動の抑制、動物的人間の理性的人間への転化を要求したからである。この生活態度は「神のご意志に即した全存在の合理化形成」を意味する。　この倫理学が教える市民の美徳は勤勉、有益な事物への取り組み、節度、節約である[107]。

但し、利益と富を目指す努力をたとえ容認したとしても、それ自体が目的であってはならず、富が神の思し召しに適うよう使用される場合にのみ、正当化された。それも高潔な手段を用いた利益追求のみが是認される。結局、ピューリタンの道徳律への服従は資本主義精神の発展に寄与する所は少なかった、とゾンバルトは結論づけた[108]。

ゾンバルトはユダヤ教の中にこそ、資本主義を特徴づけるのと同じ指導的理念があると考えた。

ユダヤ教はソフェルを中心とした聖書学者によりつくられた。彼らは決して抵抗し難い内的衝動や良心の呵責に打ちひしがれ、魂の奥底からの呻き、あるいは歓喜への陶酔や熱情的精神の恍惚感からではなく、十分に準備された計画に基づいてユダヤ教をつくり上げた。これらは有機的世界のなかに投影された思考と、目的意識の産物であり、機械的、人工的につくられ、全ての自然な世界をこぼち、隷属させ、その代りに彼ら独自の支配を確立することを考慮していた。このユダヤ教と同じように、資本主義も振る舞っている。両者ともに異質

的なるものとして、自然な被造物の世界に現れ、人為的な思考の産物として衝動的な生のただなかに登場する。合理主義または主知主義こそユダヤ教と資本主義両者の根本特徴である［そして錬金術の特性でもある］[109]。

更にユダヤ教を資本主義に類似させているのは契約に即した規制である。神は何事かを約束し、なにものかを与える。すると正義の人はそのお礼に代償の行為をする。義務を果たした人には報酬が与えられ、義務を怠った人は罰せられるという方式で、契約関係は進められる。従って行為には報酬と罰（一部は来世で与えられるが）との計算勘定が伴う。それはまた資本主義の利益獲得の理念との親近性を示す。『申命記』によれば、人は「欲望」を警戒する。しかし人はそれを金銭の獲得にいわば転向させることによって、欲望に打ち勝つことが出来る、という[110]。

ユダヤ教においても最高の生活目標は、依然として神のおきてを守ることだ。神から切り離された地上の幸福はありえない。とはいえ地上の富を聖なる目的のための秩序のなかに組み入れられた財貨として求めるのは賢明なことである[111]。大切なのは人間の最も強力な衝動を制御し、それを規制された［律法の中に定められる］軌道上を走らせ、人間の原始的な姿を解体させ、熟慮された目的－手段の機構の中に封じ込め、合理化することである[112]。この生活態度の合理化には勤勉、秩序愛、節約などの徳目が存在している[113]。ここでゾンバルトは、フロイトの「衝動の抑圧」理論を引き合いに出し、その理論の中で性欲動の制限が利益獲得衝動の方向へ押しやる可能性を示唆しているという[114]。こうして営利の理念と経済的合理主義の理念は、根本的にはユダヤ教がユダヤ人に課した生活規則の経済生活への適用に他ならない[115]。

後にゾンバルトは自説に修正を加えている。ユダヤ教の多くの教理、例えば、富の制限付きの承認、生活様式の根本的な合理化などはトマス主義の中にも含まれていた。その合理主義の形成はカトリック教よりも一層厳格かつ包括的であり、その点ピューリタニズムと似ている。とくに性欲の規制はそうである、と。とはいえ、ユダヤ教がカトリック、プロテスタントと区別される独自性は、それが資本主義を促進する教説を完全に保持し、首尾一貫して育成してきた事実にある[116]。

ユダヤ教が圧倒的な作用を及ぼすきっかけを作ったのは、この宗教が異教徒に与えた特別な措置であった。それは民族同胞と異邦人とを分け隔てする二重道徳であった。これは、異邦人の下に、数百年の長きに亘って暮らしてきたユダヤ人固有の運命によって維持されてきた。例えば、利息については、古いユダヤの共同体では他の至る所と同様に、文明化した当初は、利息の付かない貸付のみが許容されるか、相互扶助の当然の形式とされた。だが最古の法律のなかにも「異邦人」からは利息を取ってもよいという規定があった[117]。また、外国人との取引は単に遠慮会釈なく行われたばかりではなく、商業道徳が弛緩した。それは自由経済的な思考に繋がった。「神は自由取引を望まれている。神は営業の自由をお望みなのだ！」[118]。

確かにこうしたユダヤ教は資本主義、とりわけ高度資本主義の精神に適合的であるといえよう。現代のグローバルな、新自由主義の幻覚に満ち満ちた資本主義をみれば、一層納得できる。だが、宗教は資本主義の発展を阻害または促進することはあっても、それ自身が資本

主義的精神を生み出すわけではない。またプロテスタンティズムよりカトリシズムの方が資本主義に適合的である、という見方にも首肯できない。

いずれにせよ、資本主義がいかに生成したかという観点からすれば、どの宗教が資本主義精神と親和的であったかというよりは、宗派を問わず、異端者の立場にあった者の方が資本主義への道を切り開いた、という洞察の方が説得力がある。

ゾンバルトは言う。

近代国家においては完全市民、半市民という、信仰告白によってそれぞれ区別される市民の二つの範疇があり、そのうち国の教会のメンバーである前者が全ての市民の権利を所有しているのに反し、他の宗派のメンバーの後者が公職に就いたり、栄誉を授与されることが妨げられ、あるいは困難にさせられていた。至る所で、それも１８世紀半ばまで、いやほとんどの場合もっと後世になるまで、ユダヤ人は半市民であった。そればかりではなく、カトリックの国々ではプロテスタントが、逆にプロテスタントの国々ではカトリックが半市民であった。更にイギリスでは、国教徒に属さない者、長老教会会員やクェーカー教徒が、また長老教会が支配するアメリカのニューイングランド各州では高教会徒がそれぞれ半市民であった。この「異端」それ自身が資本主義の精神の一つの重要な源泉である。なぜなら、それが強力に利益追求の関心を深め、業務上の才能を向上させたからである。公共生活から排除された異端者は、おのれの全ての生活力を経済界で発揚しなければならなかった。経済だけが彼らに、国家が拒んだ共同体内部における尊敬さるべき地位を提供する可能性を与えてくれたからである[119]。

実際、フランスでは資本主義的工業ならびに海外貿易のおそらく大部分が、カルヴァン派信者（新教の異端者）の手中にあった[120]。移住の影響は大きい。１７、１８世紀におけるドイツの経済生活のなかで、フランス人移住民は至る所で、特に資本主義的工業をまったく初めてつくりあげ、個々の巨大な商業分野をほとんど手中に収めていた[121]。

イギリスにおいても資本主義的発展が本質的に外国からの移住者によって促された。

１６，１７世紀に主としてオランダとフランスからやってきた移住者は、確実にイギリスの経済生活に深い影響を与えた。彼らは商工業の多種多様な領域でおのれの企業家的な精神を活動させた[122]。

１９世紀の間にヨーロッパからアメリカに移住した者は約 2,000 万人と見積もられているが、彼らを満たした「精神」は、はっきりと資本主義の精神であった。営利への関心の優先、無意味なほどの労働、無条件、無制限、そして遠慮会釈する所が一切ない利益追求、最高の経済的合理主義といったヨーロッパの先を行く高度資本主義の精神の特徴が、すでに南北戦争以前のアメリカ人の形象に示されている[123]。

こうして伝統的社会にとって異端的存在が資本主義経済生成の主要な先導者となった[124]。

ゾンバルトは企業家精神の本質を簡潔にまとめている。

企業家は成功を望むならば征服者－組織者－商人の 3 面の性格をもたねばならない。まず「征服者」［内容的にはアドベンチャーまたは投企者であろう］であり、計画の企画能力、計画実現への衝動、行為への意志、実行力が備わっていなければならない。

次に組織者である。組織するということは他者を成功の可能性のある事業に結集し、協力させるということであり、人間と事物を計画達成のために配置することである。彼らの中には極めて多様な能力と行為が含まれる。まずは彼らの能力を評価し、ある一定の目的のために必要な人材を見つけ出さねばならない。次いで彼らを自分の代わりに働かせ、その際、各自がその能力を発揮しうるように促さねばならない。また、組織された人々の共同の活動を効率的な全体へと統合し、仕事に取り組む個々人の並列関係及び上下関係を秩序立て、更には彼らの活動をそれぞれ正しく噛み合うように配慮しなければならない。

商人としては企業家は労働市場において労働者を募集せねばならず、商品市場において取引せねばならない。この活動領域では企業家は優れた交渉者でなければならない。ここでは、関心を引き出し、信頼を獲得する、購買欲を目覚めさせる、といったことが重要となる。企業家と商人とが融合することによって資本主義的企業家となる[125]。

かかる資本主義的企業家は単純な商品流通の担い手たる商品所有者や貨幣所有者から自生的に生成するものではありえず、歴史的過程の産物である、という以外にない。

（五）

『ファウスト』に戻ろう。

『ファウスト』第二部は一転して時空を超えた広大な世界へと飛翔する。以後、錬金術を縦横に駆使することになる。ゲーテの考える「錬金術」は火、水、風、土という四元素をもって様々なものを生み出し、消し去り、時空を自由に飛翔するものである。すなわち、水をもって生成し、土をもって育て、風をもって流転し、火をもって破壊する。ゲーテはターレスの水成論を支持していたようだ。

疲れ果て憔悴したファウストは大気の精アーリエルのお陰で再び力を漲らせる。この世の高みに向いて、黎明が訪れ、世界が拓ける。

舞台は神聖ローマ帝国である。時は乱世の時代であった。

大蔵卿は皇帝に国の窮状を訴える。「この広い国にあって所有権はどこにあるとお思いか。どこへいっても見慣れないのが主人となって勝手気ままをやっている。あまりに権利を与えすぎたので、これらにはもはや手立てがなくなった。帝国の金庫は空っぽでございます」。宮内卿も訴える。「毎日、節約に努めても、出費はかさむばかり。……ユダヤの商人は容赦がない。前貸しと称して、将来の歳入を担保にとる。先喰いが酷くなって、豚ですら肥る暇がない」（『ファウスト』第二部、１９－２０頁）。

ファウストとメフィストフェレスは皇帝に取り入り、謝肉祭において様々な魔術で皇帝を愉しませた後、国の窮状の打開策として、ありもしない埋蔵金を担保とする兌換紙幣の発行を提案し、帝国の財政再建に寄与する。そこには「知りたいと望む全ての者に告げる。この紙片は千クローネの価がある。皇帝領内に埋もれた無尽蔵の宝が保証する。すぐにも掘り出して兌換に充てる用意がある」と書かれてある。それらの紙券は人々に喜んで受け取られ、現世は活況を呈した。「まやかしの富」ではあるが、メフィストフェレスらをうさん臭く思い、懐疑的であった宰相たちはこれを「全ての災いを福に転じた幸運の文書」と称して狂喜

乱舞した（『ファウスト』第二部、６６－７３頁）。明らかにジョン・ローの政策を念頭に置いて紙幣（かね）の創出術を披露してみせたのである。

皇帝は次に古代ギリシアきっての美女ヘレナと美男子パリスに会いたいと所望する。ファウストはメフィストフェレスに命ずるが、あちらは異教徒の世界だから自分にはできないという。そこには女神たちが潜んでいる。しかし、メフィストフェレスから鍵をもらって、形なく姿なく、もはや存在しない世界へ入っていき、まといつくものがあれば、鍵を打ち払って追い払い、母たち（女神）に気取られることなく香炉をもってこられれば、黄泉の国から英雄や美女を呼び出せる。あとは魔法の手が働いて香炉の煙が神々となる、という（『ファウスト』第二部、７４－８１頁）。かくて魔術の言葉によって理性を眠らせ、代わりに天空高く想像を羽ばたかせる（天文学者の言葉）（『ファウスト』第二部、８７頁）。あやかしの芝居によってファウストはヘレナとパリスを登場させる。だがあやかしであることを忘れファウストはヘレナの美しさに魅せられ、「この身の力と情熱、愛と心と祈りと狂気を捧げつくしたい」という（『ファウスト』第二部、８７－９１頁）。パリスがヘレナを連れて行こうとすると逆上したファウストはヘレナにとびかかり、パリスに鍵を振りかざした。途端に爆発が起こり、ファウストは倒れ、あやかしの姿が消える［火による破壊］。幻の愛は消え、舞台は暗転する。

第二部第二幕は近代への黎明期の思潮を代表する人間中心主義への批判となっている。舞台はファウストのかつての仕事部屋。ファウストは意識を失ったままベットに横たわっている。メフィストフェレスがファウストのガウンを着て椅子に腰を据えているところに、若い学士がやってきて、まるで新しい時代を代表するかのようにまくしたてる。「青年には高貴な使命がある！　ぼくが創らなければ世界はなかった。ぼくが太陽を海から引き上げた。ぼくの指図で月が満ち欠けをする。光がぼくの行く道を照らしている。大地はぼくのために萌え出て花をつける。……あなたがた［旧世代］を俗っぽくて、ちまちました思考から解放したのは誰でしたっけ？　ぼくは精神の命ずるままに心の中の光を追っていく。喜びに浸りながら進んでいく。背後には闇、前方には光」。「もう世界の半分は我々のものです」。意気揚々と出ていく。メフィストフェレスはいずれわかると嘯く『ファウスト』第二部、１０６－７頁）。

この「ぼく」を「資本」に置き換えれば、勃興する近代資本主義の傲慢な精神そのものである。但し、前方に待ち構えているのは光ばかりではないのだが。

続いて、かつてのファウスト博士の助手であったワーグナーが登場する。いまや大学者となって、昂然と語る。「人間は偉大な能力の持ち主なんだから、生まれ方ももっと高尚でなくてはならぬ」。そして実際に実験室で人間の生成を試み、フラスコの中にホムルンスク（化学合成による人造人間）が誕生する（『ファウスト』第二部、１１０－２頁）。

だが、ホムルンスクは生まれて間もなく生みの親であるワーグナーの手を離れる。ホムルンスクは超能力を授かったようで、眠れるファウストの上を漂い、その潜在意識―かの古代

ギリシャのヘレナとの再会を望む―を読み取り、メフィストフェレスには好色な魔女がいると唆し、ホムルンスク自身は自分の肉体を求める。ワーグナーにはこのまま大事な学問に励めと突き放す（『ファウスト』第二部、１１３－７頁）。

そして３人はそれぞれの思いを込めて古代ギリシャの世界へタイムスリップする。
メフィストフェレスの言葉は真理をついている。「とどのつまりは、おのれがつくったものに、当のおのれが振り回される」（『ファウスト』第二部、１１８頁）。

まさに現実はそうなっているではないか。科学が然り、情報技術が然り、そして金融機構が然りである。

３人はエーゲ海の周辺地域に降り立つ。メフィストフェレスとホムルンスクはそれぞれの探しものをする。ファウストは目を覚まし、ヘレナを探す。

ホムルンスクはあちらこちらを飛び回って、フラスコから生まれ出たいため、助言を得るためターレス（水成論の哲学者）とアナクサゴラス（火成論の哲学者）を探し出した（『ファウスト』第二部、１５６）。

ターレスはプロテウス（海神ポセイドンの従者で変身の名人）に頼む。「ホムルンスクは生まれ出たいので助言を欲しがっている。まだ半分しか生まれていない。頭の方は十分なのだが、からだがまるきりできていない。いまはガラスで生きているが、はやくからだが欲しいのだ」（『ファウスト』第二部、１７６頁）。

プロテウスはそれに応える。「広い海に出ていく！　まず小さいのがいい。どんどん呑み込んでいって、次第に大きくなって、そのうち出来上がるさ」（『ファウスト』第二部、１７７頁）。

ホムルンスクは海豚に変身したプロテウスの背に乗って海に向かう。（『ファウスト』第二部、１７９頁）。

ターレスは言う。「永遠の法則に従い、あまたの形を通り抜ける。人間になるにはたっぷりと時間が必要だ」（『ファウスト』第二部、１８０頁）。「なべてのものは水から生まれ、水に帰る。大洋が全ての恵みを生み出してくる」（『ファウスト』第二部、１８６頁）。

海の祭りの行列の中、美しいガラテア姫（海神ネレウスの娘）が貝の車でやってくる。姫が玉座に座っている。ホムルンスクはそれに乗って大海原に出ていく。舟が目も届かない遠くへ行くと、貝のそば、ガラテアの足もとに炎が立った。燃え立った。「あれがホムルンスクだ。プロテウスが誘い出した……憧れそのままに悶えている。光輝の玉座に触れて砕けるだろう。炎が上がった、光った、溶けた」（ターレス）（『ファウスト』第二部、１８６－７頁）。

ホムルンスクは生命の源である海と一体となって消滅する。人工的な生命の生成という錬金術の幕切れである。現代化学への懐疑でもある。

第三幕では再びヘレナが登場する。
ファウストは闇の国からやってきた豪気な一族［ゲルマン人］が築いた砦（城）の当主となっている。

ポルキュアス（メフィストフェレスが化けた女執事）が欺いてヘレナをその城に連れてくる。２人が再会する。ファウストはこの城にあるものは全てヘレナのもの、王国を２人の共同統治としたいと望む。王妃と城主がむつみ合うが、その間もなくメネラオスが大軍を率いて攻めてくる。

ファウストは直ちに応戦する。「今すぐにも軍勢を集めて、勇士たちをご覧にいれる。女を守る力のあるものだけが、その愛にあずかれる」（『ファウスト』第二部、２３８頁）。

戦いが終わる。そこにはアルカディア（桃源郷）が用意されている。そこでファウストとヘレナは仲睦まじく暮らし、２人の間には男子が生まれる。息子のオイフォリオンは手の付けられない無鉄砲な子供となる。父母の制止も聞かず、至高を目指し、岩を高く高く登っていく。翼を広げ、彼方へ運べ、と叫んで身を投げる。イカロスのごとく地に落ちる。オイフォリオンは両親の足元に落下し、死体は直ちに消え、後光が彗星のように天に昇る。嘆き悲しむヘレナは息子のいる冥界に戻る決意をする。「このいのちも、この愛も絆が切れた。涙ながらに別れを告げる。冥界の王妃ペルセポネにわが子とこの身を託す」。ヘレナがファウストを抱く、途端に肉体が消える。ファウストの胸には衣服のみが残る。衣服は雲に変わり、ファウストをつつみ込み、高みに持ち上げ運び去る（『ファウスト』第二部、２４１－２６７頁）[126]。こうして愛に満ちた幸せは消える。

第四幕では再び古代ギリシャから中世ドイツにタイムスリップする。ここでは性欲動ではなく、権勢欲、所有欲が現出する。

ファウストは新たなことを望む。「この地球上にこそ、まだまだ大仕事の余地がある。壮大な仕事をやってみせよう。精魂を傾ける。それだけの力もある」。

メフィストフェレスが揶揄う。「名を挙げたいのだろう」。

ファウストは本気だ。「この手に所有したい。行為が全てであって名声など何でもない」。どうやら海に代表される自然の猛威に戦いを挑もうというのである。

「高波に目をとられた。膨れ上がり、盛り上がる。それから崩れて波打ちながら、岸辺にドォーと押し寄せてくる。権利をよく知っているはずの自由な精神が、高慢ちきになり、やたらに激情に走って、不愉快を引き起こすのとそっくりだ。……波はそれ自体が不毛で、果てしなく忍び寄り、ただただ不毛を振りまいている。ふくれ、盛り上がり、渦巻いて、なだれかかる。荒涼とした一帯が広がるばかり。波は力強く寄せてくるが、引いた後は何も実らせない。土と水と風のなすがまま、意味のない力に苛立って、絶望したくもなろうじゃないか。そこで思い立った。ここで戦ってみる。勝ってみせる。……あの傲慢な海を岸からしめ出すのだ。水に浸された広大な地域を沖の方へ押し戻す。ことこまかに計画をねりあげた。これが願いだ」（『ファウスト』第二部、２７９－８０頁）。

今や事業主としてのファウストの意気込みを示す。[「傲慢な海」とは無機的で退嬰的な社会の暗喩であろうか]

つねにある衝動あるいは表象コンプレックスが心的エネルギーの最大量を自己の掌中に握って、それによってその衝動あるいは表象コンプレックスは人間の自我を頤使するに至る。通例、自我はそのエネルギーの焦点に自己を同一化し、……そこに吸い寄せられてしまう。

しかし、そんな風にして一種の狂気が偏頗妄想あるいは憑かれた状態が最もひどい偏向が生じ、それが心のバランスを極めて深刻に危うくする。かかる偏向への能力が、ある種の事業成功の秘密である。だから文明は一所懸命になってこういう偏向を養成しようと努める[127]。

メフィストフェレスは戦争を利用して、ファウストの望みを遂げようと企む[128]。
現皇帝は「考えが甘い。統治するのと楽しむのと、二つを同時にやろうとした」。ファウストはそれは「大間違いだ」と断ずる。「命令する者は、まさに命令のなかにこそ、深い喜びをみつけなくてはならない。胸には、はっきりした思いがある。例えそうだとしても、それを他人に告げてはならぬ。側近の耳に囁いたときが実行の時で、世間があっと驚く。そうしてこそ、いつも最高の権力者であって、威厳が保てるというものだ――遊びは人を卑しくする」。
メフィストフェレスは言葉を継ぐ。「皇帝がまさにそうだった。それもどっさり楽しんだ！そのうち統制がとれなくなった。上下入り乱れて争いを始め」、人々は「いがみ合い、殺し合う。……おかげでみんな、図太くなった。……何とかそうやって生きのびてきた」。
メフィストフェレスはファウストを唆す。「安らぎをもたらす者こそ君主であって、皇帝は任に堪えず、またその意志もない―されば君主を選ぼうではないか。新しい君主が国を甦らせる。誰にも安全が保障され、新しく生き返った世に、平和と正義が実現する」（『ファウスト』第二部、２８１－４頁）。
世は再び乱れ、皇帝側と贋皇帝を擁する反乱軍が争っている。情勢を眺めて勝ち目のありそうな皇帝側に加勢することになる。メフィストフェレスが後ろ盾になって、ファウストが総大将となる。戦闘は「下々の者に任せて、総大将は後ろに隠れていればいい」（メフィストフェレス）。メフィストフェレスは３人の助っ人（「暴れ男」、「つかみ男」、「にぎり男」）を連れてくる。３人の力持ちの活躍や水のあやかしや鬼火により敵の目をくらまし、皇帝側が勝利する。欺いた者の世襲領地を取り上げ、４人の侯爵や大司教（兼大宰相）の領地を加増する。ファウストもその功績で海岸一帯を与えられる。ファウストはメフィストフェレスの思惑通り、戦争を利用して富を手に入れたのである（『ファウスト』第二部、２８３－３１８頁）。
ここでは魔術を使い、あらゆる手段を弄して富を手に入れる資本の無慈悲で強欲な姿を描いている。

第五幕ではファウストの命令で広大な海岸一帯を豊かな経済地域に変貌させる状況が描かれる。
「考えてきたことを実行に移すとしよう。主人の命令は何よりも重い。皆の者、床を蹴って起きろ、一人残らず仕事にかかれ、のこりくまなく考えた。それを仕上げる道具だ、鍬に鋤だ、杭の後はならしていく。整然と、迅速にやる。一番の働き者には褒美をとらせる。千の手をもつ一つの頭がこの大事業をやり遂げる」（『ファウスト』第二部、３３９頁）。
「なるだけ数を増やせ、飴と鞭でせかすのだ。たっぷり払ってやれ、鼻薬を効かせろ、必要なら脅しつけろ！」（『ファウスト』第二部、３４１－２頁）。これぞ企業家の企業家たる所

以である。ゾンバルトはわざわざこの箇所を引用して、「これはもっとも深い企業の意味をあらわしている」と称賛している（『ブルジョア』９５－６頁）。だが命令と飴と鞭で労働者を思うように働かせ得るほど、人間は単純ではあるまいし、「労働力商品化の無理」の意味の一つはそこにある。

その土地の農民ピレモンが旅人に語る。「賢い主人に大胆な召使がいて、濠をつくり、土堤を築き、新しい領地を生み出し」た。「広場や農地が広がり、村もあれば森もある」。（『ファウスト』第二部、３２１頁）。港や運河もつくり、海外との交易も盛んとなり、品物を山と積んだ船が頻繁に行き交う。無論、犠牲も少なくない。立ち退きを迫られたり、人柱も立った（『ファウスト』第二部、３２１－４頁）。

海外との交易は限りなく海賊行為に近い。「海は広いのだ。やることなすこと、でっかくなくちゃあ。魚であれ船であれ、委細かまわず襲いかかる。……力ある者が正しい。何を獲るかが大切で、獲り方は問わない。船にあっては、戦さと商いと分捕りが三位一体と心得た」（メフィストフェレス）。働いた３人の力持ちは「応分のものを頂かなくては承知できない」と不服を漏らすが、積み荷はまず広間に運ばれ、主人の見分の後に褒美をもらう手はずだ。もっともその前にちゃっかりと分け前はくすねていたようだが（『ファウスト』第二部、３２６頁）。

メフィストフェレスはファウストに言う。今や大きなお宝を手にしている。「知恵が報われ、浜と海とが一つになった。運河から出た船を、海がいそいそと迎い入れる。……おまえの大きな志と、下の者たちの勤勉とが、海の幸、陸の幸を手に入れた」（『ファウスト』第二部、３２７頁）。

見事にメフィストフェレス（資本）はファウスト（資本家）をして大きな富の獲得に成功させたのである。つまり、資本の論理が経済社会に入り込んだのである。ここで資本の論理とは、他者の欲求を引き出し、それにつけ込んで利殖するということである。

（六）

では資本の活動とはどんなことか。資本はどのようにして資本たりうるのか。無論、資本の生成は商品・貨幣の存在を前提する。ごく一般的に言えば、価値形態論及び価値尺度論の課題が商品の需要と供給の集約とその価値の評価を行う機制の解明にあるとすれば、流通手段、支払手段、蓄蔵手段の各論は収入と支出を媒介する貨幣の機能を対象とする。だが資本は貨幣論から論理必然的に導き出されるものではない。

資本は先に見たように商品・貨幣所有者のある種の行動の動機やパターンを内在的契機として登場するが、それ自身は歴史的産物である。その資本の運動態様において貨幣論で扱われた需要と供給及び収入と支出の問題が新たな形で措定されることになる。

資本の運動の一般的範式は商人資本形式に示される。マルクスによれば商人資本は「資本一般の最初の自由な存在様式」[129]であり、それは「流通部面に閉じ込められており、その機能はただ商品交換を媒介することだけだから、その存在のためには単純な商品、貨幣流通

のために必要な条件のほかにはどんな条件も必要ではない」[130]。単純な商品流通がW－G（販売＝収入）・G－W（購買＝支出）と表されるならば、資本の運動はG－W（支出）・W－G′（収入）と表される。収入額が当初の支出額を上回る分が利潤となる。その「利潤は、第一にただ流通過程のなかだけで行われる行為によって、つまり買いと売りという二つの行為で得られる。そして第二にそれは最終行為である売りで実現される。つまりそれは譲渡利潤である」。「高く売るために安く買うのが商業の鉄則である」[131]。

では、この売買差益は如何にして得られるか。宇野弘藏によれば、「商品経済は価格の変動を通して、価値を基準とする売買を行うので」あるから，その「価格差の巧みな利用によるものである」[132]。では如何にして価格差が生まれるのか。もし、それが社会的需給をクリアする均衡価格に至る調整過程における偶然的な価格変動であるとすれば、商人資本は価格の上昇または下落の主観的予想に基づいて売買するであろうから、個々の資本の利得はその変動の確率分布に依存する。それは全く不確定である。そういう投機的行動も含むとはいえ、商人資本の利得の取得も蓋然的でなければ、その存在根拠を失う。商人資本の利潤が蓋然的であるためには需給の均衡価格を前提せざるを得ない。

一般的に考えられうる価格差は地域的及び時間的な需給関係の差異による価格差であろう。価格の安い所で買い、高い所で売る、または安い時期に買い、高い時期に売るというのは、通常の商人資本の行動パターンではある。だが、岩井克人も言うように、その価格差によって利潤が得られるとすれば、資本の参入が増え、利潤は縮小していく[133]。資本が自己増殖する価値の運動体として利潤をあくなく追求していく存在である、というのは一種のトートロジーであるから、利潤を得られなくなるというのは資本の死を意味する。

商人資本は単に価格変動もしくは価格差を外部的に利用する、受動的運動体ではない[134]。ではその資本としての存続を根拠づける商人資本的活動とは何か。

「容易に開始しうるG－Wをもって出発し、第二段のW－Gで、単純なる流通［W－G－W′］のいわゆる命懸けの飛躍を意味する第一段階を引き受ける」[135]。あるいは「商人資本の場合にはある媒介的活動が行われるのであって、それが詐欺と解釈されようと労働その他なんと解釈されようと、ともかくそういう活動が行われるのである」[136]。

だからW－Gを引き受け、何らかの社会的活動を行うのである。マルクスは「商人資本はただ商品交換を媒介するだけである」というが、その活動は単に与えられた社会的需給により決められた商品配分の実行ではない。

商品経済においては一般に、需要が予め決められているわけではない。これから見いだされなければならないのである。そこに流通部面の不確定性の本来的問題があり、「命懸けの飛躍」の意味がある。商人資本はその活動を引き受けるのである。その活動によってまだ未定の需要を発掘するのである。それは新たに需要を創造するというものではない。潜在的な需要を顕在化するというに過ぎない。だが、そのことによって需要未定の商品を安く買いうるのであり、需要を顕在化することによって高く売りうるのである。空間的移動や時間的要素を伴う場合も同様である。例えば、遠隔地貿易も、経済外的要因を捨象したとしても、外在的に価格差を利用したものとはいえない。そこには需要発掘的な活動がある。だから空間的運動が時間的運動に翻訳されることにもなる。

無論、潜在的需要を顕在化したからと言って、新たな価値を形成するわけではなく、また流通過程に本来的な不確定性が解消されるわけではない。しかし、こうした活動によって商人資本の利潤はそれなりの蓋然的根拠をもち、その存続の可能性を得る。

それは流通世界における孤立した個別的諸主体の私的諸欲求に取り入り、それらを引き出すことによって、需要を顕在化し、価格を高めて、利潤を獲得するのである。それによって商人資本がその商品交換を媒介する売手から見れば、商品の価値可能性が現実化され、買手からみれば貨幣を介した欲求充足が可能となる。だから、売手と買手の双方にとって、より有利に売り、また最も欲する商品を探し出して購入するという、それ自身一定の時間と情報を要するであろう取引が商人資本によって代行されることにもなる[137]。その意味ではＧ－Ｗの段階は決して「容易」ともいえないのである。需要を見出せそうな商品を探し出すのも重要な活動ではある。

情報化の時代において、商業形態は大きく変わったが、その本質は変わらない。ただ、商業資本の相手はマスとしての消費者大衆としての顧客だけではなく、「個」客に変化したのである。情報収集と情報処理の飛躍的高度化によって、各消費者の消費動向を迅速に調べ、その欲求に合わせて、ジャストインタイムで商品の提供を行ったり、各企業と消費者をネットワークを通じて連結し、個々の消費者の欲求をそそり、引き出すような商業を行うようになった。

電子商取引 EC ではインターネット空間で結びつく多数の売手や買手がバーチャル空間での契約に基づいて実物域での商品流通に多大な影響を与える[138]。

ＥＣはオンライン環境にあるインターネットその他のコンピューター・ネットワークを利用して行われる取引であり、企業同士の取引、企業と消費者間の取引、消費者同士の取引に分けられる。

企業間の取引ではＥＤＩ（electric data interchange）として、商取引に関する受発注や見積もり、入出荷といったデータを紙ベースからデータ交換形式にて行う。このようなＥＤＩは特定企業間で行われる閉鎖的な電子情報の交換である。

狭義ＥＣはインターネットによる商取引であり、広義ＥＣはそれに加えてインターネット以外のＶＡＮや専用線によるコンピューター・ネットワークシステムを介した商取引である。

サイバーモールは電子商店街ともいわれる複数のオンラインショップの集合体である。インターネット取引の特徴は、相対取引とは異なり、相手方の姿が見えない中で不特定多数の者が関与する点にある。従来の商習慣より、一層の取引ルールの明確化、消費者保護（セキュリティの確保やパソコンの操作による取引安全性の確保）、プライバシー保護が求められる[139]。

このバーチャル・マーケットは日本でも急速に拡大している[140]。

インターネットは分散・並列ネットワークであり、複数のデータを相互に連結できる構造をもつが、機能的には双方向性、個別対応性、オンデマンド性という特徴がある。Web 上では企業が双方向でのやり取りを繰り返すことにより、膨大な数の顧客（消費者）との関係を個別に構築することができる。その際、顧客のプロフィール情報、購買履歴、顧客が自ら

伝える直接情報（検索、問い合わせなど）などを手掛かりに、データマイニング、コンテンツベースフィルタリング（同一ジャンルのアイテムの推奨）、協調フィルタリングなどのパーソナライゼーション技術を駆使して、顧客を「個」客として識別しつつ、最適のコミュニティに振り分け、マーケティングに結びつける。

更には２０１１年頃から「ビッグデータ」の実用レベルでの活用が可能となった。ビッグデータは予め処理のフォーマットが定まっていない「非構造化データ」という特徴があり、消費者個人のあらゆる生活の行動歴が収集と分析の対象となり、一層精緻な個別化が始まっている[141]。

これは「顧客の囲い込み」戦略（パーソナル・マーケッティングやワン・トゥ・マン・マーケティング）といえる。ホームページの閲覧履歴やネット上の購買履歴などの顧客情報を数学的に処理 - 操作可能な類型的データへと一度還元し、このデータの組み合わせから顧客ごとに将来の購買パターンを割り出すという一種のマトリックスが採用されている[142]。

BtoC-EC では個別分散的な欲望に照準を合わせる。顧客の「脱標準化」といえよう[143]。だが、ＥＣの部分性は免れず、扱う商品は限定される。また供給面でそれに適合した生産体制との連携が必要となる。それはカスタマイゼーションとマス・プロダクションを合体させたマス・カスタマイゼーションと呼ばれるモジュール化、ＦＭＳやＣＩＭまでを含む包括的かつ迅速に組み替え可能な生産体制である[144]。更に安全性の確保された電子決済システム、即時的な小口配送のためのロジスティクスなどのインフラ整備が必要となる[145]。

また情報量が多ければよいというものではない。分析の目的に合う良質な情報が含まれているとは限らない。ノイズが多く入り込む。きちんとした解析が必要だが、フルラインナップのビッグデータ関連ソリューションが揃っているとは言い難い。業者が得たいのは母集団の解析ではなく、データに含まれる個人情報なのであるから、個人の権利が冒される怖れがある[146]。

半田正樹は大澤眞幸の『電子メディア論』に拠りながら、的確にこのシステムの問題点を指摘している。「顧客にとっては消費すべきモノやサーヴィスがそれぞれの「個」に見合うマトリックスの要素という形で実質的には指図ないし指定される事態として現れることを意味している」[147]。

産業資本は生産過程を包摂し、消費者の欲求を満たしうる商品を供給することによって成立する。資本が生産過程を掌握するということは、生産手段を用意し、労働市場から労働力を確保し、一定の技術水準の下で働かせて、素材価値に付加価値を加えて商品を作り、労働力価値との差を利潤としうるということである。付加価値の大いさは他者たる労働者をいかに働かせるかにかかっている。

労働力商品化の無理は、資本には労働力を作れない、ということだけではない。労働契約では労働の性格からしてその内容を具体的且つ正確に規定できない所にある。命令して、飴と鞭を巧みに使い分ければ、雇用主の思い通りに働いてくれるわけでもない。労働者の働く動機・意欲や能力・実行力は多様である。よく知られた生物学的傾向から言えば、従業員のうち、自主的に意欲をもって一所懸命働く者は精々、2 割か 3 割であろう（それは種の保存

のための自然の摂理ではあるが)。それでも、ある者はそこそこに、ある者はその能力に応じて、主体性を発揮して働くようにしなければなるまい。そこが生産の組織化を担う企業家たる者の腕の見せ所というわけだ[148]。そうでなければ、また付加価値を生み出してはくれない。

情報化の進展は生産活動にも大きな変化を及ぼしつつある。在庫管理、財務管理、物流の効率化、最適化以外にも、生産現場のデータを大量に収集し、処理してデジタル化することにより、全面的というわけではないが、モジュラー化、労働の単純化、定型業務の自動化を進める。更に情報技術を駆使し、アイディアや設計のバーチャル空間での表現、シュミレーションを可能にすることによってリードタイムを短縮化するといった効果は確かにある。

また情報化のもとでの企業の経営手法の革新も見られる。
例えば、バーチャル・コーポレーションの出現がそうである。消費から流通、生産に関わるいくつもの企業が相互に情報共有と連結を通じて、あたかも一つの企業のように対応し、行動する。例えば、デルは消費者参加型のネット直販モデルを開発し、これを自ら「仮想統合企業」と呼んだ[149]。ここではサプライヤーはパートナーであり、最終消費者の需要をサプライヤーに伝達し、それに対応する製品の供給を求める。デルはサプライヤーを厳しく管理し、情報を通じて制御する[150]。このモデルでは流通域は実物域に付随した、その単なる反映ではなく、むしろバーチャルな空間に生じた変化が実物域に伝達されてそこでの活動を促進していくという、バーチャル主導型の企業の有り様を示す[151]。

バーチャル・コーポレーションとしてのＳＣＭはチェーン・メンバー／チェーン・プレーヤー（供給業者、サーヴィス業者、製造業者、卸売業者、小売業者、顧客など）が結節点となって形成されるネットワークのチェーン管理ソフトを通じたマネジメントである。従来はメンバーのそれぞれが需要を予測しつつ、製造、発注、在庫を用意したりしてきたのを、例えば、小売段階での実販売量に関する情報（ＰＯＳ情報）を共有することによって製造量、発注量、在庫量を制御・調整する。それによって全体最適を目指す企業間分業システムとしてのネットワークである。ここでは合意形成の脆弱性が避けられない。

更に次世代ＳＣＭとして捉えられているのがＣＰＦＲ（Collaboration Planning、Forecasting and Replenishment）である。これはチェーン・メンバーがインターネットを介して在庫情報やＰＯＳデータなどをリアルタイムで共有しつつ、それぞれの販売計画と生産計画を突き合わせることによって需要予測と在庫補充を共同で行うものである。それにより全体の調整はより密となるが、メンバーの自律性は後退する[152]。

マス・カスタマイゼーションは受注生産方式であり、ＢＴＯ（Build to Order）をベースとしている。それは予め着脱可能なシステムの構成単位であるモジュールについて、その構成部分であるコンポーネントを幾つか用意し、顧客の注文があれば、それに相応しいコンポーネントを組み合わせて製品に仕上げる。このシステムに顧客はインターネットを通じて参加する[153]。

いずれにせよ生産が資本によって組織されることにより、資本がそれ自身で価値を生み出すかのような仮象は一層増す。利潤の一方は「資本所有の単なる果実として現れ、他方は、

単に資本を用いて機能することの果実として、……現れる」[154]。そのこと自身には情報化時代であっても変わりはない。

金貸資本はその原初的形態においては「商品取引と同時に貨幣の種々の機能が発展しているということの他には何も必要ではない」[155]。「利子生み資本」となっても「資本主義的生産様式の本質的な一要素をなしている限りでの利子生み資本を、高利資本から区別するものは、決してこの資本そのものの性質や性格ではない。それはただこの資本が機能する条件が変化したというだけである」[156]。

では、この資本形式は如何にして生成するか。商品流通の発展に伴って、貨幣需要が発生するが、収入と必要な支出が時間的・量的に一致しない場合が生ずる。そうすると将来の収入を先取りして、支出しようとする欲求が生まれる。借手は一定の代価を支払っても、自己の欲求を満たそうとするであろう。貸手は資金の一定期間の使用に対して対価を要求する。その代価はさしあたり両者の相対取引として、個別に決定される以外にないが、こうした取引が広がり、貸付市場が形成され、時間的、空間的に差はあるが、代価は一定水準に決まってくる。

借手が商人資本であろうと、産業資本であろうと、消費者であろうと、その点には変わりはない。ただ借入の動機がより多くの利潤を得るためか、不生産的消費かという違いである。

金貸資本形式は、従って、言うなれば他者の貨幣への緊要な必要性につけこんで利殖することによって成立する。それが一般化していけば、貨幣の所有権それ自身に価値を生むかのように観念される。それが利子である。それ故、「資本の自己再生産的性格、自己増殖する価値、剰余価値の神秘的な性格」が「純粋に現れている」[157]。

金融業資本[158]ともなれば、まさに現代の錬金術そのものの具現化である。
現代の錬金術は、火、水、土、風の代わりに信用能力（レバレッジを含む）、情報収集能力、情報処理能力、情報発信（表現）能力、評価能力を駆使して、「あやかし」の金融商品や金融業務をあみだし、富の増殖の仮象を作り出す。これぞ、物的富というよりは一般的富そのものへの飽くなき欲求を引きずり出す純化された利殖手法である。

１９６０年代から銀行によって勘定系システムの展開としてコンピュータが取り入れ始め、以降、オンラインシステムが発展する。８０年代中頃からは「スウィープ」口座、デリバティブ、貸付債権のセキュリタイゼーションといった新金融商品や新業務（エレトロニック・バンキングなど）が開発されるようになった。９０年代中期以降はインターネット・バンキングが盛んになる。インターネットにおける情報のやり取りがインタラクティブであり、顧客情報データベースを基にワン・ツー・ワンマーケティングなどインターネットを使った様々なマーケティングの展開が可能となったが、それにより金融取引がバーチャル空間上で完結される環境が整ってくる。ネット上の流通業者といえるポータルサイト運営業者も金融業に乗り出してきた[159]。

証券取引所も業務を全てコンピュータによって処理する売買システムも導入され、東京証券取引所では１９９９年に場立ちによる売買立会場における売買は廃止された。インターネ

ットを通じて証券会社に株式の売買などの注文を行うオフライン・トレードも活発化した。ネット専業証券会社も多数参入した[160]。

証券市場の大部分は売手と買手の情報の差、あるいは情報認識の差が利得のベースになっているのであって、好みや能力の差に基礎を置いているわけではない。この知見に立てば、金融が何故、途方もない利益を上げられるのか、あるいはそのように見えるのかを説明しやすいし、その利益が何故、金融活動が生み出す付加価値と無関係にもたらされ得るかも分かり易くなる[161]。

現代の金融市場では経験や勘に頼って個別銘柄を選ぶというゲームのような投資が平均、共分散、リスク回避の指数を組み込んだ工学に姿を変えた[162]。

金融工学の基礎にあるのは確率論であるが、金融工学はリスクを過小評価するような都合の良い仮定（価格変動の正規分布）に基づいて構築されている。だが価格変動の分布はベキ分布であり、正規分布よりはるかに多くの大きな変化がある。そしてそうした大変動は金融市場にはつきものである[163]。実際、巨額の資金が占星術のような集団心理で動いている。

新金融商品はクレジット・デリバティブと呼ばれ、住宅ローンから、株式、為替まで様々な投資の将来のリターンをパッケージしたもので、取引の対象となる基本の金融契約が生み出すリターンに対する請求権となる。リスクをヘッジする新しい手段と株価などの原契約の将来の値動きに投機する新しい手段の両方を提供し、従来の金融市場の隙間を埋める。一般には前払いの手数料はほとんどなく、将来にリターンのフローや市況商品を交換する二当事者間の契約となる。取引の形態は先渡し、先物契約、オプション、スワップなどがある。

現在ではより複雑なデリバティブや複数の原資産を束ねてパッケージ化して販売する「証券化」商品（リスクの分散）も開発されている。その代表的なものを挙げておこう。
一つはクレジット・デフォルト・スワップＣＤＳであり、ＣＤＳの買手は、債権者や投資家で、保証料（プレミアム）を支払う代わりに、契約の対象となる債権が契約期間中にデフォルトとなった場合、それによって生じる損失（元本・利息等）を保証してもらえる。売手は、プレミアムを受け取る代わりに、デフォルトになった場合、買手に対して損失分を支払うものである。

モーゲージ担保証券ＭＢＣは何百ものモーゲージを束ねたプールから生じる元利金の支払いに対する請求権である。モーゲージの現保有者―たいていは銀行―によって市場に売りに出される。

債務担保証券ＣＤＯは資産担保証券ＡＢＳの一つで、複数の債券などの資産から生じるキャッシュフローに対する請求権である。支払いの優先順位が異なる複数のトランシェに切り分けて販売され、損失が発生した場合には優先順位の低いトランシェから高いトランシェへと順に分配される仕組みである。投資家はその投資嗜好に合わせて、どのトランシェに投資するかを選べる[164]。

銀行はこうした取引の信用リスクをバランス・シートから消し去る。更には債権を購入し、それを加工して作った債券を販売することを目的とする仕組み投資会社（ＳＩＶ　ダミー会社に近い）設立して、こうした取引をバランス・シートから消し去った[165]。

クレジット・デリバティブは効率的なバーチャル・バンキングの象徴的な存在であるはずだが 、投資家に対して、将来の望ましくない価格変動といったものから身を護る手段だけでなく、巨額な収益につながる可能性のあるハイリスクな賭けをするための手段も提供する 。つまり、リスクを減らす機能と、はるかに大きなリスクを生み出す機能を併せ持つ [166]。

市場が非効率的であるならば、そこに金儲けのチャンスがある[167]。この非効率性を直すのがヘッジファンドの機能のはずだが（例えば、堅実だが割安で放置されている株を買い、派手に急成長している株を売る）、市場の乱高下に拍車をかける可能性もある。例えば、１９９４年にＦＲＢが短期金利を0.25%だけ引き上げると発表した時に債券市場が暴落した。レバレッジを利かせていたヘッジファンドは不意打ちを食って、保有債券を投げ売りし始め、幾つかのヘッジファンドは衰退した[168]。

ヘッジファンドの構造そのものが、偏執狂的な規律を助長する[169]。だが、ヘッジファンド自身はへこたれてはいない。その後、一部のヘッジファンドは新しいマーチャント・バンクになっている。あとに続くファンドも出てくれば、再び「金融システムを脅かす」存在になるかもしれない。欲望とリスクは常に私たちにつきまとう[170]。

このように流動性のない実物資産を現金や流動性にさっと変換できるように見せかけることが、現行システムの錬金術の本質である[171]。

金融制度の基底にある預金チャネルは流動性幻想の上に成り立っている。それは大勢の人がその恩恵にあずかろうとしない限りにおいて持ち続けることのできる幻想である[172]。

世界金融危機の主な原因はＦＩＣＣ（fixed interest,Currency,Commodities の略であり、それらを基礎に置きデリバティブというターボエンジンを備えたトレーディング）のトレーディングという計り知れない複雑な上部構造をその預金チャネルにかぶせたことである[173]。

だが金融恐慌の現実を見るまでもなくデリバティブは根源的な不確実性に対する保険を提供できない[174]。この錬金術はデフォルトをもって終焉する自己崩壊的循環である（ジリアン・テット）。

仮想通貨創出による利殖も現代的錬金術である。その代表が「ビットコイン」であるが、それは２００９年５月にインターネット上に現れたネットワーク型暗号通貨であり、それにより世界の誰とでも低コストかつ匿名的に決済取引を行うことができる。ビットコインは通常の電子マネーのように第三者機関による認証なしに、Ｐ２Ｐネットワークを利用して発行や取引をすべて分散的に行う。ビットコインクライアントと呼ばれるソフトウェアをインストールした世界中の何百万台ものコンピューターが相互に通信することでこうしたネットワークが作られる。この仮想通貨の分散的発行・管理のためには「マイニング」という独特の方法を用いる。ビットコイン・ネットワーク上には、全てのビットコインでの取引情報が公開され、これは「ブロックチェーン」と呼ばれる。ビットコインで取引を行いたい時、受取人や取引情報が随時、ブロックチェーンに追加され、追加されたことが確認されれば、実際の取引がネットワーク上で決済される仕組みである。この新たな取引情報をブロックチェーンに記録するためには、高度な演算処理を必要とするパズルを解かねばならない。このパズルを解くのが「マイナー」と呼ばれるコンピュータないしその所有者たちで、この作業が「マイニング」である。パズルを一番初めに解くことが出来たマイナーがブロックチェーンに新たな取引情報を追加することによりビットコインが発行され、マイナーはそれを自分の

ものにすることが出来る。この複雑な計算パズルはセキュリティや匿名性の強化のために設けられている。簡単には不正入手は困難である。また発行量が増えるにつれて演算処理の計算量が加速度的に増加するためにビットコインの発行量の上限は２１００万枚以下に抑えられるようにプロトコルに実装されている。コインの発行量は４年ごとに半減する仕組みになっているため、その価値は逓増する。そうするとビットコインの創設者は初めに発行されたビットコインを容易に保有することができるので、大きな値上がり益も期待できる。それが投機を助長することは容易に予想されよう[175]。ビットコインは仮想と詐欺の側面の奇妙に混じり合ったデジタル通貨である[176]。

かように現在の金融市場は全能思考、空想、現実が混ざり合う危うさをもつ病的な状況にある[177]。

国際化した市場でギャンブルのメカニズムが広く適用されている。ギャンブラーは敵対心が強く、社会不適応で、反抗的、攻撃的であり、魔術的に思考し、更に経験から学ぶことができない（ハラー、ラインハード）[178]。

２００８年の世界金融恐慌をもって現代錬金術の創り出した幻覚はひとまず消え去った。ジリアン・テットはうまいことを言っている。「より広範な社会的事象に対する金融業界の関心の欠如こそ、その失敗の核心を突く」。「金融マンは自らの数学的モデルが限られたデータに基づくものであることを忘れ」た。「まるでプラトンの国家論の比喩にある洞窟の中の人間たちのように、目に入るのは洞窟の壁に映る外の現実の影だけで、現実そのものを見ることはほとんどなくなっていた」[179]。

こうした現代錬金術が社会経済の実体に大きな影響力を及ぼすようになれば、経済過程の不確実性、不安定性は不可避となる。

ゲームソフトとかオンラインゲームといった情報財ともなれば、まさしく現代錬金術以外の何物でもない。バーチャル空間において、実在の自分ではない何者かになりうるのである[180]。

西垣通は情報化社会に対し警告を発している。「人間を機械的とみなす思考は、情報社会のなかに深く、ひろく根を下ろしている。情報処理を行う部品として人間を位置づけることは、その掛け替えのない尊厳を奪うことになる」[181]。

西垣によれば、情報とは生命体の内部で生起し、形をとる（form）ものである[182]。外界の刺激を受けると脳神経系の内部に変化が起こり、原 - 情報（生命情報）が発生する。心的システムは常に脳神経システムと相互作用しているので、原 - 情報を素材として思考が産出する。記述行為により社会情報が形成され、それはまた原 - 情報の発生の仕方にフィードバックする。但し、心的システムの作動自体は必ずしも外界からの刺激を必要としない。例えば、夢がそうである。とくに刺激を受けなくとも脳細胞の一部が興奮して思考が活性化することはありうる。原理的に現実と幻覚のあいだの区別は存在しない[183]。

基礎情報学において社会システムは「コミュニケーション」を構成素とするオートポイティック・システムである。そこではコミュニケーションがコミュニケーションを自己循環的に／再帰的に算出するプロセスが有機構成として作動している[184]。

コンピュータとの対話は難しいが、ウェブを介した会話は可能である。コンピュータが相手で対話コミュニケーションが行われない場合でも、まるでリアルタイムでコミュニケーションが実行されているような気がして引き込まれていくことは少なくない。例えば、コンピュータ・ゲームがそうである。リアルタイムの時空間が出現しているように感じられる。そこでは時間の流れを人間ではなく、ゲーム（コンピュータ）が統御するという逆転現象が起きる。オンライン・ネットゲームはこれを更にネットを経由した人間同士のリアルタイムのコミュニケーションを組み合わせたものである。この「社会」における自己は日常の自分とは異なるゲーム用の自己である［例えば、中世の騎士になる］[185]。ゲーテの描いた錬金術の世界そのものではないか[186]。

（七）

再び『ファウスト』に戻ろう。悲劇も終幕を迎える。
ファウストが計画した事業は資本の威力を借りて、完成しつつあった。だがその大事業は画龍点睛を欠いたようだ。どうやらファウストにとって領地にある老夫婦の住む小屋が目障りなのだ。そこにある菩提樹も手に入れたい。代替地を用意したのに立ち退かない。「自分の仕上げた所を、一目で見渡したい。人間精神の大事業だ、人知というものを証しだてる。無数の人々のための広大な安住地だ。富んでいるのになお不足を感じるのが、最も厳しい責苦だろう」（『ファウスト』第二部、３２７頁）[187]。
「富んでいるのになお不足を感じる」のはまさしく資本家の業である。
ファウストは早急に彼らを立ち退かせ、新しい土地に移すことを命ずる（『ファウスト』第二部、３２８頁）　だが、資本は容赦ない。メフィストフェレスは強引に小屋を燃やしてしまい、老夫婦は犠牲となる。

ファウストは激怒する。「命令を忘れたのか！土地の交換を申し付けた、奪えなどとはいわなかった。呪うてやる。皆で罪をかぶれ！」（『ファウスト』第二部、３３０－２頁）

このあたりから、資本家としての自己に疑問を感じ始める。資本家の矛盾的自己同一は分裂していく。資本の仮象が剥がれて、人間性の人格が現れ始める。

その夜、四人の灰色の女が登場する。彼女らの名は『不足』、『罪』、『憂い』、『困窮』という。悪霊のようだ。いずれも近代資本主義の害悪を示す。ファウストの所では『憂い』のみが居ごごちが良いよいようだ。他の三人は帰る（『ファウスト』第二部、３３３－６頁）

ファウストは嘆く。「自然とじかに向き合ってこそ、初めて生き甲斐があるものだ。ずっと昔、確かにそんな風に生きていた。そのうち闇夜に踏み込み、この世と世の中を呪う言葉を覚えてしまった。いまや辺り一面、あやかしの輩が満ち満ちて、避けるすべがわからない。昼間は明晰で思慮深いというのに、夜ともなると虚妄の網にからめとられる」（『ファウスト』第二部、３３５頁）。

『憂い』が現れるとファウストは精一杯粋がる。「世の中を駆け通してきた。欲望の赴くところの前髪をつかみ、気に入らなければ放り出した。逃げるやつはそのままにした。ひたすら望んで、それをやり遂げ、更に望んで、生涯をつらぬいてきた。はじめは猛々しかった

が、次第に賢明に、思慮深くなった。地上のことは十分に知った。天上のことは知るべくもない。天上に憧れ、雲の上に仲間を求めるなどは愚かしい！　永遠を求めて何になろう。認識したものこそ手にとれる。この世の道をどこまでも辿っていく。あやかしが現れようと、わが道を行く。求める限り苦しみがあり、幸せがある。ひと時も満ち足りることはない」(『ファウスト』第二部、３３７頁)。

抵抗虚しく『憂い』はファウストに息を吹きかけ、盲にしてしまう。「人間は所詮は生涯、盲目だ。だからファウスト、おまえもとどのつまりは盲となる」(『ファウスト』第二部、３３８頁)。

盲目となったファウストは、それとは気付かず、夜となったと思い込み、皆に干拓の大事業を命ずる。メフィストフェレスは死霊を集めて、先頭に立って濠(アナ)を掘り進める。実は墓穴なのだが、ファウストは大勢が働いている気配を感じて、これから出来上がるであろう理想郷を思い描き、至幸の境地となる。

山裾にある沼地を「きれいに干拓するのが最後にして最高の大事業だ。多くの人々のための土地ができる。各人、豊かとはいかなくても、働けば自由に住めるはずの小天地だ。畑が緑にかわり、実りを迎え、新しい土地に人と家畜が穏やかに暮らしている。大胆に干し上げ、堤がこれを守っている。その中は一つの楽園だ。どんなに波が立ち騒ぎ、無理やり入り込もうとしても［これも暗喩か］、しっかり防いで入れさせない。協同の意思こそ人知の至りつくところであって、日ごとに努める者は自由に生きる資格がある。どのように危険に取り巻かれても、子供も大人も老人も、意味深い歳月を生きる。そんな人々の群れ集う姿を見たいのだ。自由な土地を自由な人々と共に踏みしめたい。その時こそ、時よ、とどまれ、おまえは実に美しいと、呼びかけてやる。この自分が地上にしるした足跡は消え失せはしないのだ――。身を灼(や)くような幸せの予感の中で、いまこの上ない瞬間(とき)を味わっている」(『ファウスト』第二部、３４２頁)。　ファウストはその虚構の繁栄を「永遠の今」と思い込み、そのなかで人間としての人格を取り戻すのである。

だが資本の論理からファウストが逃れようとするや否や、資本に魂を奪われることになる。

ファウストは仰向けざまに倒れ、地面に横たわる。

メフィストフェレスは哀れんで言う。「何であれ願いつづけ、求めつづけた。ついぞ満ち足りたことのない男だった［資本家である限り］。千々に変わる姿を追い続けた挙句、哀れな奴め、とどのつまりは出来損ないの空虚な時を握りしめようとした。しきりにじたばたしていたが、時が勝って、老い朽ちたのが土に横たわっている」[188]（『ファウスト』第二部、３４３頁)。

「終わるのも、何もなかったのも、二つながらに一つのこと。永遠の創造がどうしたというのだ、創られたものを無の彼方へとひっさらう、それが終わりだ。つまりは、どういうことだ？　なかったも同然、それがあるかのように堂々巡りをくり返す。永遠のからっぽのほうがずっとましよ」(『ファウスト』第二部、３４３－４頁)。

「おだぶつすると魂は逃げたがる。こちらには血で署名した証文があるのだ」(『ファウスト』第二部、３４５頁)。資本主義にとって契約は絶対である。

こうして埋葬が始まる。
だが、そこへ舞台右手の上方から光が射しこめる。天使たちが歌う。
罪を赦して、塵を生かし、全てのものに、友愛をしるして、列をつくり、漂っていけ。
天使たちは薔薇をふりまきながら（薔薇の花はは愛のシンボル。不浄なものを焼く炎ともなるので、悪魔には大敵)、歌い続ける。
眩しい薔薇が、匂いをはなつ、漂いながら、よみがえらせて、……春よ、萌え出よ、やすらう者に、楽園をつくれ。
更に美しい歌が続く。
きよらの花、うれしい炎、心のままに、ひろめる愛、もたらす歓喜、まことの言葉、澄んだ大空、永遠の群れ、あまねく光。愛だけが愛する者を、みちびいていく（『ファウスト』第二部、３４７－５１頁)。
天使たちはメフィストフェレスを出し抜いて、ファウストの不滅の魂を高みへと運んでいく。資本主義に奪われた魂を救済しえるのは愛と友情であった。
「有象無象はまっぴら。愛と友情が祝福してくれる」(『ファウスト』開演前の作家の述懐)。

《註》

[1] ゲーテ『ファウスト』の翻訳は、池内紀訳、集英社、第一部、１９９９：第二部、２０００による。
[2] 『ファウスト』大山定一訳（筑摩書房、１９６９）のあとがきによれば、A.ジッドは詩句の美しさに惹かれたようだ。とくに第２部冒頭部分について「ゲーテの詩句は外界の諸力の神秘な影響を見事に表現している」と書いている。自然の深さや大きさ、恐ろしさ、優しさに改めて気づかされた、というのである。
訳者の大山によれば、自然がもっているこの神秘な根源的作用と、この創造的な生命力とが『ファウスト』全編を貫通するもっとも大きな要素である。『ファウスト』は要するにダンテの『神曲』が投げかけた反対映像である。二つの作品は地獄や悪の世界を通ってやがて天上の清らかな栄光へ到達する人間の道程を描いている。但し、『神曲』の世界の確固不動の、明晰判明の精神構造に比べると、『ファウスト』の世界は混濁した重苦しいもの、渦巻き動揺し逆流するもの、暗澹陰鬱なもの、錯綜と混沌に満たされていた。ファウストはそのなかで苦難の道を歩まねばならなかった。それには時代背景がある。ゲーテは宗教改革やルネッサンスにより中世の荘厳な世界秩序が打ち壊された時代以降の人間状況の諸問題と対決せねばならなかった。人々はもはや教会の権威やドグマには縛られない。新時代の合言葉は、人間の解放された自由な感情と、宇宙的生命の根源をなす「自然」であった。人々は不安、懐疑を抱えながらも、未知の可能性に挑んでいかねばならなかった。後に見るゲーテの自然研究はその試みの一つであった。

これに対しユングは『ファウスト』は最初から最後まで隈なく錬金術的思考に彩られている、と述べている（Ｃ．Ｇ．ユング『心理学と錬金術』（Ⅰ、Ⅱ）（新装版）池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、２０１７、Ⅱ、３５６頁)。とはいえ後にその自伝でその評価を見直している。
「初めて『ファウスト』を読んだ頃には、ゲーテ独特の英雄神話が集合的経験であり、ドイツ民族の運命を予言的に述べているのだといったことに、私はいっこうに気づいてはいなかった（A.ヤッフェ編『ユング自伝　２－思い出、夢、思想』河合隼雄ほか訳、みすず書房、１９７３、５１頁)。後年のユングの研究の深化を示すのだろうか。
中野和朗はその『史上最高に面白いファウスト』（文藝春秋、２０１６）において、あえて深遠な哲理が含まれているという通説を軽くいなして、『ファウスト』を難解ではない最高のエンターテイメントとして読み直した。ゲーテの魂の眼は「世のため人のために奉仕する名もなき民」を徹底的に笑わせ楽しませ、その営みを慰め、励ます所にある、と言い切った。
ゲーテ自身は１８３２年３月１７日付けヴィルヘルム・フォン・フンボルト宛の書簡で、『ファウスト』を「この非常に真剣な諧謔」と呼んでいたようだ（ゲーテ『色彩論』木村直司訳、筑摩書房、２００１、９１頁訳注)。エンターテイメントとは聊かニュアンスが異なる。

[3] 『ゲーテ形態学論集　植物篇』木村直司編訳、筑摩書房、２００９、２９－３０頁。

[4] 『ゲーテ形態学論集　動物篇』木村直司編訳、筑摩書房、２００９、７２頁。

[5] 『ゲーテ形態学論集　動物篇』７３頁。

[6] ゲーテ『色彩論』木村直司訳、筑摩書房、２００１、２２頁。

[7] ゲーテ『色彩論』２３頁。

[8] 『ゲーテ形態学論集　植物篇』４４４－５頁。

[9] 『ゲーテ形態学論集　動物篇』木村直司編訳、筑摩書房、２００９、解説３８１頁。

[10] 『ゲーテ形態学論集　植物篇』８６頁訳注。

[11] 『ゲーテ形態学論集　植物篇』４４５－６頁：ゲーテ『色彩論』２４頁。

[12] いかなる分析も総合を前提する。ニュートンの犯した誤りは、唯一の、しかも人為的な現象を根底に据え、その上に仮説を築き、この仮説から、きわめて多種多様な無制限の現象を説明しようとしたことにある（ゲーテ『色彩論』木村直司訳、筑摩書房、２００１、５８頁)。［ある所与の条件の下でのマクロ的現象の説明には有効であることは付け加えておかねばなるまい。］
根本的真実の展開は思弁においてよりは、むしろ実践において示され易い。実践こそ、精神によって受け取られたもの、内的感覚によって真実と見做されたものの試金石だからである（ゲーテ『色彩論』６３頁)。「初めに行為ありき」である。

[13] 上山安敏『フロイトとユング―精神分析運動とヨーロッパ知識社会』岩波書店,２００７,２８８－９頁。但し、ゲーテの原型は同時多発的なものであって類型であるため、進化の時間軸とは関係がない。あくまで比較形態学や分類学での類型である。だからゲーテの思想は時間軸を入れた変容ではなく、無時間性の類型である（上山安敏『フロイトとユング』、３０２頁)。従って、本質的意味での時間的契機は捨象される。つまり、ゲーテ理論は生態系のある状態から別の状態への変容過程は説明できない。

[14] 「資本主義社会では、商品経済という特殊の形態のために、その経済生活は、常識的には屢々不可解なる諸現象を呈し、特にその解明を必要とする」(宇野弘藏『経済原論』岩波全書、1964、１頁)。カール・ポランニーが『大転換』や『人間の経済』などの著作において、つとに主張したのも資本主義社会において商品というフィクションが労働と土地に適用されて、人間社会の実体を転換させ、［それ自身特殊な］市場が社会を包摂し、本来的な人間の経済を変質させたことであった。

[15] 上山安敏『フロイトとユング』、２０７頁。

[16] Ｓ．フロイト『フロイト全集１５　精神分析入門講義』（１９１５－１７年)、新宮一成ほか訳、岩波書店、２０１２、１４頁。

[17] リビドーは人間に生得的に備わっている衝動の原動力となる本能エネルギーのことである。フロイトはそれを性欲動と考え、ユングは広く全ての行動の根底にある心的エネルギーとした。

[18] 『フロイト全集１５』第２２講。

[19] 『フロイト全集１５』１５頁。
[20] Ｓ．フロイト『フロイト全集２１　精神分析入門講義』（１９３２－３７年）、道籏泰三ほか訳、岩波書店、２０１１、２８３－４頁。
[21] Ｓ．フロイト『フロイト全集２１』９２－４頁。
[22] 『フロイト全集２１』９４－８頁。　ｃｆ．小此木・馬場編『フロイト　精神分析入門』有斐閣、１９７７。
[23] 『フロイト全集２１』７６頁。
[24] 『フロイト全集２１』９８－９頁。
[25] 『フロイト全集２１』１００頁。
[26] 『フロイト全集２１』７８－８８頁。
[27] 『フロイト全集２１』１０１頁。
[28] 『フロイト全集２１』２２０頁。
[29] 『フロイト全集２１』２２４頁。
[30] 『フロイト全集２１』２３１頁。
[31] 『フロイト全集２１』２３７頁。
[32] 上山安敏『フロイトとユング』、Ⅶ。
[33] 『フロイト全集２１』２３５－６頁。ここには幾分の真理も含まれているが、単純化し過ぎている。
[34] 『ユング自伝　２－思い出、夢、思想』５１頁。
[35] 『ユング自伝　２－思い出、夢、思想』４８頁。
[36] Ｃ．Ｇ．ユング『無意識の心理』（新装版）高橋義孝訳、人文書院、２０１７、２７頁。
[37] ユング『無意識の心理』１３２頁。
[38] ユング『無意識の心理』５３頁。
[39] ユング『無意識の心理』４２－３頁。
[40] ユング『無意識の心理』４９頁。
[41] ユング『無意識の心理』１５５－６頁。
[42] ユング『無意識の心理』１５６頁。
[43] Ｃ．Ｇ．ユング『自我と無意識の関係』（初版新装版）高橋義孝訳、人文書院、２０１７、５７頁。
[44] ユング『自我と無意識の関係』４２頁。
[45] ユング『自我と無意識の関係』４４頁。
[46] ユング『自我と無意識の関係』７５頁。
[47] ユング『自我と無意識の関係』８６頁。
[48] ユング『自我と無意識の関係』９２頁。
[49] ユング『自我と無意識の関係』１５８－６１頁。
[50] ユング『自我と無意識の関係』１６４－５頁。
[51] Ｃ．Ｇ．ユング『心理学と錬金術』（Ⅰ、Ⅱ）（新装版）池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、２０１７、Ⅰ、５３頁。
[52] ユング『自我と無意識の関係』１３４－８頁。
[53] 『心理学と錬金術』Ⅰ、２０－１頁。
[54] 『心理学と錬金術』Ⅰ、３８頁。
[55] 上山安敏『フロイトとユング』、５０２頁。
[56] 上山安敏『フロイトとユング』、５０３－４頁。
[57] トーマス・セドラチェク／オリヴァー・タンツァー『続・善と悪の経済学―資本主義の精神分析』森内薫／長谷川早苗訳、東洋経済新報社、２０１８、４３－４頁。
[58] 『続・善と悪の経済学』１４４－５頁。
[59] 『続・善と悪の経済学』１４８頁。
[60] 『続・善と悪の経済学』１４６－７頁。

[61]『続・善と悪の経済学』２８６頁。
[62] トーマス・セドラチェク、『善と悪の経済学』村井章子訳、東洋経済新報社、２０１５、２２８頁。
[63] 『心理学と錬金術』Ⅰ、６０頁。
[64] 『心理学と錬金術』Ⅰ、４０頁。
[65] 『心理学と錬金術』Ⅱ、３２－３頁。
[66] 『心理学と錬金術』Ⅱ、３５７，３６０頁。
[67] 『心理学と錬金術』Ⅱ、３６１－２頁。
[68] 『続・善と悪の経済学』３６８頁。
[69] Ｊ．Ａ．シュムペーター『経済発展の理論』（上、下巻）塩野谷祐一ほか訳、岩波書店、１９７７、上巻、２３４－５頁。
[70] シュムペーター『経済発展の理論』上巻、２３７－４４頁。
[71] シュムペーター『経済発展の理論』上巻、２４５－８頁。
Ｐ．Ｆ．ドラッカーの『イノベーションと企業家精神』（上田惇生訳、ダイヤモンド社、２００７）はその題名からしてもシュムペーター理論を受け継いだものであるが、ドラッカーにとっては「企業家精神 entrepreneurship」は精神性の問題ではなく、実務能力の問題である。とはいえ、それが全く新しいことを行うことに価値を見出し、変化を探し、変化に対応し、変化を機会として利用すべく、学びつづけ、粘り強く働き、自らを律し、適応する意志である、とすればそれは既存の慣行や文化などの環境におけるそれとは異質な心性でなければならない。従って、その行動の動機、意欲の根拠を解明することは無益な精神作業ではあるまい。
[72] Ｊ．Ｍ．ケインズ『雇用・利子及び貨幣の一般理論』塩野谷祐一訳、東洋経済新報社、１９８３、１４８頁。
[73] ケインズ『雇用・利子及び貨幣の一般理論』１５９－６１頁。ｃｆ．小畑二郎『ケインズの思想』慶応義塾大学出版会、２００７，１６５頁。
[74] 佐伯啓思『貨幣と欲望―資本主義の精神解剖学』筑摩書房、２０１３。病理は現代資本主義に限ったことではないであろう。
[75] Ｋ．マルクス『資本論』マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳、大月書店、国民文庫、（１）１３７頁。
[76] 『資本論』（１）１３９頁。
[77] 『資本論』（１）２３１頁。
[78] 『資本論』（１）２３２頁。
[79] 『資本論』（１）２５７頁。
[80] 『資本論』（１）２６４頁。
[81] 『資本論』（１）２６６頁。
[82] 『資本論』（１）２６８頁。
[83] 『資本論』（１）２３２頁。
[84] 資本形式論に関する限り、資本形式の歴史性を強化する宇野弘藏自身は宇野学派内部で孤立しているようである（宇野弘藏編『資本論研究』筑摩書房、１９６７、第１巻、第３部Ⅲの討論）。
[85] 鈴木鴻一郎編『経済学原理論』東大出版会、１９６０、上巻、序説、及び岩田弘『世界資本主義』未来社、１９６４、第１，２章をみよ。
[86] 大内力に代表される。『大内力経済学体系　第１巻　経済学方法論』東大出版会、１９８０、第２章を参照。
[87] 降旗節夫の次のような表現に端的に示されている。「『自分自身の本性によって、自己を揚棄し、自分自身によって反対のものに移っていく』というヘーゲル論理学によりつつ、「『商品及び貨幣』の形態規定の発展の結果として商人資本形式を内在的に導き出すと共に、この商人資本形式から更に金貸資本形式を媒介として産業資本形式を展開せざるを得ない必然的な論理的過程のうちにこの『貨幣の資本への転化』の課題が全面的に解決される」（降旗節夫『資本論体系の研究』青木書店、１９６５、１２０頁）。

だが概念を対象に置き換えただけで、ヘーゲル論理学の観念性が克服できるわけでもない。ヘーゲル自身も内在的移行の説明に成功しているとは言えないようだ。Ｇ．Ｗ．Ｆ．ヘーゲル『小論理学』牧野紀之訳、未知谷、２０１８、８１２頁の訳注など。

なお。こうした視点は『経済学批判要綱』にもみられる。マルクスは「一般的富の物質的代表物としての貨幣」のもつ自己矛盾［倹約しなければ蓄蔵貨幣は増えないが、同時に蓄蔵する限りでは貨幣は増えない］から資本を展開しようとしているが、説得力はない（『経済学批判要綱』大月書店、第５分冊、１０３９－１０６３頁）。

[88] この点で山口重克の次のような主張は首肯できる。「流通論は、商品、貨幣、資本を均衡編成を達成している社会的生産の物的外皮、表面形態としてではなく、社会的生産の均衡編成そのものの達成を媒介する、商品所有者、貨幣所有者、資本家といった流通上の諸主体の個別的な関連として捉え、とりあえず商品流通世界の中だけで展開されるこれらの主体の行動の動因、様式、基準、結果などに限って考察する」（大内秀明、桜井毅、山口重克編『マルクス経済学の現状と展望』東洋経済新報社、１９７８、１０３頁）。但し、この個別性についての理解は疑問が残る。ひとまず、商品所有者ないし資本家に本来的な一般的性格として個別性をおさえておこう。
山口重克『経済原論講義』（東大出版会、１９８５）では資本形式をその投下様式による商品売買資本形式、商品生産資本形式、貨幣融通資本形式の３形式に分別し、より理論的抽象度の高い、従って現実の多様な資本主義の分析基準となりうることを意図した資本形式論を展開している。

[89] 宇野弘藏『経済学方法論』東大出版会、１９６２、１１３頁。

[90] 宇野『経済学方法論』５３頁。

[91] 宇野『経済学方法論』５２頁。

[92] 宇野『経済学方法論』１６４頁。

[93] 宇野『経済学方法論』８６頁。

[94] Ｋ．マルクス『経済学批判要綱』第１分冊、２７頁。訳文は『資本論草稿集』大月書店、第１巻、５７頁による。

[95] 宇野『経済学方法論』６２頁。

[96] Ｋ．マルクス『経済学批判要綱』第１分冊、２５頁。訳文は『資本論草稿集』第１巻、５４頁による。

[97] 宇野弘藏編『資本論研究』筑摩書房、１９６７、第１巻、３２６頁。

[98] マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（上・下巻）梶山力／大塚久雄訳、岩波書店、１９５５。

[99] マルクスも言う。「商品生産者の社会にとっては、抽象的人間に対する礼拝を含むキリスト教、ことにそのブルジョア的発展であるプロテスタント教や理神論などとしてのキリスト教が最も適当な宗教形態である」（『資本論』（１）－１４６頁）。

[100] その限りではゾンバルトの研究は宇野理論との親近性がある。大塚史学がウェーバー理論に依拠しているのとは対照的である。

[101] ヴェルナー・ゾンバルト『ブルジョア　近代経済人の精神史』金森誠也訳、講談社、２０１６、２５２頁。

奥山誠はゾンバルトの再評価が進んだ1990年代以降の20年間のゾンバルト研究の動向を総括している。それによるとゾンバルトは指導的経済主体としての企業家をその経済学の中核に据え、企業家に宿る「資本主義的精神」の歴史を辿った。資本主義には批判的であり、農業や手工業を重視した。『１９世紀のドイツ国民経済』では「欲望の奴隷」たる「新人類」の精神的荒廃を憂えた。資本主義的な「事象化」ないし「平準化」は人間と自然に対する物質の優位を促進し、かつ文化の地域的独自性の喪失に拍車をかけた、と考え、それを「アスファルト文化」と表現した（奥山誠「ヴェルナー・ゾンバルト研究の動向」『経済学史研究』（経済学史学会）55巻１号（２０１３））。

[102] ゾンバルト『ブルジョワ』３５４頁。

[103] ゾンバルト『ブルジョワ』３５５頁。

[104] ゾンバルト『ブルジョワ』３５７－６０頁。

[105] ゾンバルト『ブルジョワ』３７７－８頁。
[106] ゾンバルト『ブルジョワ』３７９－８２頁。
[107] ゾンバルト『ブルジョワ』３８４－８頁。ゾンバルトはむしろ奢侈が資本主義的な経済形式の発展を促すものであると、考えた。（ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也訳、講談社、２０００）。信仰心との絡みでいえば、「奢侈は確かに害悪であり、罪であるけれども、産業を促進することによって全体には利益を齎す」という考え方がイギリスを始め拡がっていった（同上書２４１頁）。
[108] ゾンバルト『ブルジョワ』３９０－３頁。
[109] ヴェルナー・ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』金森誠也訳、講談社、２０１５、２１７－８頁。
[110] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２２１－７頁。
[111] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２３３頁。
[112] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２６７頁。
[113] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２７７頁。
[114] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２８１頁。
[115] ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』２８３頁。
[116] ゾンバルト『ブルジョワ』３９５－６頁。
[117] ゾンバルト『ブルジョワ』３９７－８頁。
[118] ゾンバルト『ブルジョワ』４０３－９頁。
[119] ゾンバルト『ブルジョワ』４３７－８頁。
[120] ゾンバルト『ブルジョワ』４４０頁。
[121] ゾンバルト『ブルジョワ』４５０頁。
[122] ゾンバルト『ブルジョワ』４５３－５頁。
[123] ゾンバルト『ブルジョワ』４５６－７頁。
[124] 網野義彦は日本の中世において社会共同体から疎外された人々が商工業や金融の仕事に就き、将来の資本主義経済の源流となっていくことを示した（網野義彦『日本社会の歴史』（上、中、下巻）岩波書店、１９９７）。
[125] ゾンバルト『ブルジョワ』第５章。
ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』第９章「資本主義的経済人の機能」でも企業家と商人の役割が語られる。ここでは企業家のなかに発明家、発見者、「征服者」、組織者の人間のタイプが融合されている。内容的には変わらない（１３７－１４１頁）。
　マルクスの企業家像は生産の監督・指揮者である。一面では、全ての多数の個人が協業する労働では。必然的に過程の関連と統一とは、一つの指揮する意志に表され、また、ちょうどオーケストラの指揮者の場合のように、部分労働にではなく作業場の総活動に関する機能にも表される。これは、どんな結合的生産様式でも行われなければならない生産的労働である。
　他面では―商業的部門は全く別として―このような監督労働は、直接的生産者としての労働者と生産手段の所有者との対立に基づく全ての生産様式の下で、必然的に発生する（『資本論』（１０）８４頁）。だから資本家＝企業家それ自身の独自の活動はとくに問題にされない。
[126] ゲーテの説明ではオイフォリオンは「比喩的存在であり、詩が擬人化されたもの」であり、「随所に随時、姿を現すことが出来る幽霊のようなもの」である。精神の翼を使って自由に飛び回るのである（中野和朗『史上最高に面白いファウスト』１６２頁）。
　中野によれば、ゲーテはオイフォリオンのこの無謀な行為を描くことによって耽美的で非理性的なドイツ・ロマン主義の破壊的本質（熱狂的な民族主義と世界支配衝動の根底）を象徴的に示している、という（中野和朗『史上最高に面白いファウスト』１６４頁）。
[127] ユング『無意識の心理』１１８－９頁。
[128] ヴェルナー・ゾンバルト『戦争と資本主義』（金森誠也訳、講談社、２０１０）によれば近代国家の軍事活動は武器、食糧、衣服、輸送手段、通信設備などの整備、充実させるために資本主義産業の発展を大いに促進した、という。

[129] 『資本論』（９）２０５頁。
[130] 『資本論』（９）１８６頁。
[131] 『資本論』（９）１９３頁。
[132] 宇野弘藏編　現代経済学講座、新訂『経済原論』、青林書院新社、１９６７、６５頁。
[133] 利潤の存在は、遠隔地貿易の規模を拡大し、商業資本主義の利潤の源泉である地域間の価格の差異を縮めてしまう（岩井克人『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房、１９８５、５９頁）。
[134] 岩井克人や柄谷行人はより一般化して表現している。「利潤とは、価値体系と価値体系のあいだにある差異を資本が媒介することによって生み出される」岩井同上書５０頁）。「貨幣をもつ者は商品交換を通して貨幣を蓄積しようとする。それは異なる価値体系の間での交換から得られる差額（剰余価値）である」（柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、２０１０、１２頁）。
　だが差異は外的に与えられたものではなく、創り出されるものでなければならない。そうでなければ、利潤獲得は蓋然的なものにはならない。
[135] 宇野『経済原論』旧版、岩波書店、１９５０、上巻、７５頁。
[136] 『資本論』（１０）４６９頁）。
[137] 商人とは時間・空間双方のレベルでのネットワークの中で情報収集・加工を集約するホストの役を担う（原洋之介『アジア・ダイナミズム―資本主義のネットワークと発展の地域性』ＮＴＴ出版、１９９６、１２０頁）。
[138] 阿部真也『流通情報革命―リアルとバーチャルの多元市場』ミネルヴァ書房、２００９、　１２０－１頁。
[139] 吉川達夫編著『電子商取引法　ガイドブック　第２版』中央経済社、２０１２　２－５頁。
[140] その規模を見てみよう。
日本の 2017 年の BtoC-EC 市場規模は、16 兆 5,054 億円（前年比 9.1%増）である。EC 化率は、5.79%　（対前年比 0.36 ポイント増）。（※EC 化率は物販分野のみを対象）
物販系でＥＣ化率が高いのは事務用品・文房具、家電・ＡＶ機器、雑貨・家具などであり、１４年のデータではそれぞれ 28.1%、24.13%、15.49%である。サーヴィス系では旅行、金融が多い。デジタル系は出版、音楽・動画配信、ゲームなどである。
　日本の CtoC のネットオークションの市場規模は 2017 年に推計、3,569 億円であった。2017 年 1 年間のフリマアプリの市場規模は推計、4,835 億円となった。
　2017 年の日本の BtoB-EC 市場規模は、317 兆 2,110 億円（前年比 9.0%増）となった。「その他」を除いた EC 化率は、前年から 1.3 ポイント増の 29.6%であった。
　ＥＣ化率の高いのは輸送用機械や電気・情報関連機器であり、１４年にそれぞれ 44.1%、33.5%であったが、１７年にはそれぞれ 61.1%、52.4%に増加した。
　更に国境を越える越境 EC 市場も存在する（以上、『平成 29 年度 我が国におけるデータ駆動型社会に係る基盤整備　（電子商取引に関する市場調査）報告書』　、経済産業省 商務情報政策局 情報経済課、平成 30 年 4 月。
www.meti.go.jp/press/2018/04/20180425001/20180425001-2.pdf#search　主に第１章の調査結果サマリーによる。『流通統計資料集』２０１５年版、流通経済研究所、４８頁も参照）。
[141] ＳＧＣＩＭＥ編『現代経済の解読』（第３版）御茶の水書房、２０１７、２９６－７頁。
[142] 清水真志「Ｅコマースのインパクト」（電子商取引ないしＷｅｂビジネス）（ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』御茶の水書房、２００７所収）５２頁。
[143] ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』、５２頁。
[144] ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』４７－８頁。
[145] ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』５８－９頁。
[146] 本山美彦『人工知能と２１世紀の資本主義―サイバー空間と新自由主義』明石書店、２０１５、第８章。
[147] 半田正樹「『経営手法の革新』という情報化」（ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』所収）、８１頁。

[148] この点はプリンシパルーエージェント関係と同様であるが、エージェンシー理論の欠陥は労働主体を単なる命令の遂行者としてしか見ていないことにある。命令それ自体の問題も等閑視される。
[149] 阿部真也『流通情報革命』１０９－１１頁。
[150] 阿部真也『流通情報革命』１１４－６頁。
[151] 阿部真也『流通情報革命』１２０頁。
[152]ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』７６－８頁。
[153]ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』８０頁。
[154] 『資本論』（１０）６９頁。
[155] 『資本論』（１０）４４４頁。
[156] 『資本論』（１０）４５５頁。
[157] 『資本論』（１０）４６９頁。
[158] 金融的支配と巨大産業企業体の融合である金融資本と区別してこの言葉を用いる。
[159] 石橋貞男「デジタルエコノミーにおける金融業」（ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』御茶の水書房、２００７所収）９９－１００頁。
[160] ＳＧＣＩＭＥ編『情報技術革命の射程』１０７－９頁。
[161] ジョン・ケイ『金融に未来はあるか』薮井真澄訳、ダイヤモンド社、２０１７、５６頁。
[162] ベノワ・Ｂ・マンデルブロ／リチャード・Ｌ・ハドソン『禁断の市場―フラクタルでみるリスクとリターン』雨宮絵里ほか訳、東洋経済新報社、２００８、１０４頁。
[163]『禁断の市場』第１章。
[164] マーヴィン・キング『錬金術の終わり―貨幣、銀行、世界経済の未来』遠藤真美訳、日本経済新聞出版社、２０１７　１７２－４頁。ｃｆ．ジョン・ケイ『金融に未来はあるか』１１４－５頁：ジリアン・テット『愚者の黄金―大暴走を生んだ金融技術』土方奈美訳、日本経済新聞出版社、２００９、第１章、第３章、第４章、第６章。
[165] ジリアン・テット『愚者の黄金』８７－９０頁、１４３－８頁。
[166] ジリアン・テット『愚者の黄金』３２頁。
[167] セバスチャン・マラピー『ヘッジファンド』（Ⅰ、Ⅱ）三木俊哉訳、楽士社、２０１２、Ⅰ、２５頁。
[168] 『ヘッジファンド』Ⅰ、２７－８頁。
[169] 『ヘッジファンド』Ⅰ、３３頁。
[170] 『ヘッジファンド』Ⅱ、３１２頁。
[171] マーヴィン・キング『錬金術の終わり』２９４頁。
[172] ジョン・ケイ『金融に未来はあるか』２５２頁。
「貨幣と信用によって織りなされた資本制経済システムは物質的下部構造であるどころか、信用によって存在する宗教的世界のようなものである」（柄谷行人『世界史の構造』２７頁）。
[173] ジョン・ケイ『金融に未来はあるか』２５９頁。
[174] マーヴィン・キング『錬金術の終わり』１７７頁。
だから予測不可能な真の不確実性を考慮すれば、社会の安定のためには万全とまでは言えなくとも終身雇用制や税を財源とした確定給付型年金の制度は決して悪い制度ではない。
[175] 西部忠『貨幣という謎』ＮＨＫ出版、２０１４、１３３－１４７頁。
[176] ジョン・ケイ『金融に未来はあるか』２４９頁。
実際、２０１９年３月下旬に仮想通貨の資産運用を手掛けるビットワイズ・アセットマネジメントが世界８１の交換所を対象に売買状況を分析し、アメリカ証券取引所に提出された報告書は、仮想通貨交換所が取引が活発なように見せ掛けるために、取引業者が自社内のアカウントで売買を繰り返す「偽装」が目立つと指摘した。交換所の中には相互に相殺される買いと売りが一体となった注文が多く、昼夜で取引量が変わらないなどの不自然な点が多く見られた、という。調査期間の日次取引量６０億ドルのうち、実体のある顧客取引は２億７３００万ドルに過ぎず、９５％超が水増しされていたと分析した（日本経済新聞、２０１９．４月４日）。

本山美彦はビットコインが金融権力からの自立をめざしたものとしてその趣旨に賛同しているが、プルードン流の地域通貨と同一視することは出来まい。ビットコインが地域通貨と同様の通貨となるためには、その前提として一定程度自律性をもった地域経済の確立が必要となる（本山美彦『人工知能と２１世紀の資本主義―サイバー空間と新自由主義』明石書店、２０１５、第 11 章）。

[177] 『続・善と悪の経済学』２２３頁。

[178] 『続・善と悪の経済学』３３９－４０頁。ｃｆ．スーザン・ストレンジ『カジノ資本主義』小林襄治訳、岩波書店、１９８８。

[179] ジリアン・テット『愚者の黄金』３５４－５頁。

[180] 本山美彦『人工知能と２１世紀の資本主義―サイバー空間と新自由主義』明石書店、２０１５、９１－３頁。

梅棹忠夫は情報産業なるものは虚業であり、情報財はいわば「擬似商品」である、と断じている。但し、否定的な意味で言っているのではなく、工業の時代が有機体たる人間の筋肉系を中心とした中胚葉諸器官の機能が重要となるのに対して、脳神経系あるいは感覚器官の外胚葉諸器官の機能が相対的な重要性を増す、精神産業の時代の到来だという（『梅棹忠夫著作集　第 14 巻　情報と文明』中央公論社、１９９１）。

[181] 西垣通『ネットとリアルの間―生きるための情報学』筑摩書房、２００９、７２頁。

[182] 西垣通『生命と機械をつなぐ知：基礎情報学入門』高陵社書店、２０１２、３４頁。

[183] 西垣通『生命と機械をつなぐ知：基礎情報学入門』８２－４頁。

[184] 西垣通『生命と機械をつなぐ知：基礎情報学入門』８８頁。

[185] 西垣通『生命と機械をつなぐ知：基礎情報学入門』９１－３頁。

[186] 「近代社会とはその内部の支配的な関係性を主観性＝主体性を備えた個人の集合として描くことが出来るような社会である」（大澤眞幸『資本主義のパラドックス―楕円幻想』筑摩書房、２００８、９頁）。ここに社会の支配的な関係性を逃れられない個の主体性幻想＝パラドックスがある。

資本主義は信用創造［本来「公的」なものである貨幣を私的な存在が創出する］に代表される錬金術を駆使する。「錬金術師たちはどんな場合にも異邦人として登場」し、「自らの姿態を大衆の前にことさらに現前させ、一種演劇的に振る舞う」（大澤眞幸『資本主義のパラドックス―楕円幻想』３１頁）。

ディズニーランドは実在ではあるが、遠近法を利用して錯視を創り出す演出をしている。空間的・時間的外部に向けて越境する運動は近代という社会がもつ本源的なダイナミズムを示す（『資本主義のパラドックス―楕円幻想』３０８頁）。それは現実であって、現実ではない、局所空間である。

今日、私たちの具体的な絆のもとになる「私たち固有の生活様式」こそ、真に抽象的な観念である。それは、私たちの生活世界も、グローバルな規模の金融的・情報的・社会的なネットワークの一部として、その力学に規制されているという事実を覆い隠すスクリーンである。それは幻想や夢であって、実在ではない（大澤真幸『資本主義の利己的な延命策』信濃毎日新聞、２０１９）。

[187] 現代の消費者が抱えるトラウマの大半はネガティブなトラウマではなく、ポジティブなそれである。つまり、自分を取り巻く状況全体をポジティブな情動のプリズマを通して見るようになる。少し前まで興味を覚えていたものが、突然色あせて見えてくる。例えば、格別美味しいものを食べると「おいしさ」の座標軸が長期的に変わってしまう。「陶酔効果をもつ強烈な幸福感」は「ふつうの幸福感」の座を奪い取ってしまう（『続・善と悪の経済学』２９１－３頁）。

[188] 資本主義は資本の無限の増殖を目的とし、利潤のたえざる獲得を追求していく経済機構の別名である。利潤は差異から生まれる。……しかし、差異は利潤によって死んでいく。……商業資本主義の利潤の源泉である地域間の価格の差異を縮めてしまう。産業資本主義は労働力の価値と労働の生産物の価値の差異を利潤の源泉とするが、その資本の蓄積によって差異を縮めてしまう。ポスト産業資本主義においては新技術や新製品のたえざる開発によって未来の価格体系を先取りし、現在の市場で成立している価格体系との差異を媒介して利潤を生み出しているが、それは新技術の模倣を招いてその差異を縮めてしまう。差異を媒介するとは、すなわち差異そのものを解消することなの

である。資本主義とは、それ故、つねに新たな差異を探し求めていかねばならない。それは永久運動のごとき「動態的」な経済機構である（岩井『ヴェニスの商人の資本論』５８－９頁）。

競争圧力の下で資本は絶えず、差異を創り出していかねばならない。資本とは走っていなければ倒れてしまう運動体なのである。